

---

# ライトの旅 ～気球に乗って～

守り人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライトの旅 ～気球に乗って～

### 【Nコード】

N2423J

### 【作者名】

守り人

### 【あらすじ】

チートなピチューによる旅の目的あやふや、キャラ設定めちゃくちゃ  
の文章がめちゃくちゃなほのぼの？ラブストーリー（嘘）です！

読んだ人は感想を書いて下さい、めちゃくちゃ励みになります！！  
おかしな所は指摘して下さい！（b^\_^。）

題名の気球に乗っては途中で意味が無くなってしまいます（汗）

気球に乗ろう！（前書き）

一話は300文字程度と少ないですが読んで欲しいです！

気球に乗ろう！

ジリリリリリリ！

目覚まし時計が鳴り響く

この物語の主人公ライトは飛び起きた

「やっべー！！遅刻だ！ん？待てよ、学校は昨日卒業したんだ…って今日はこっそりと旅に出ようとしてたんだ！」

大声を出している時点でこっそりではないが良しとしよう？

早速、荷物をまとめる、っと言っても肩掛けのカバンに少しの量を入れるだけなので、一分もかからなかった。そしてお気に入りの青色のゴーグル（決してプールに入る時に使うものではありません）をつけて青色のスカーフをマントのように着けて完了だ！

足音を忍ばせて家を出る

「ふー」

書き忘れたがライトはピチューだ、少し乱暴な言葉使いなのはスルーしてもらいたい

「後は家の裏の茂みに隠しておいた小さな気球を出すだけか」

茂みの中をこそそこそと探ってライトはお目当ての物を見つけた

「ライターでガスの部分に点火してっど……よし！！しゅっぱっ！」

ライトを乗せた気球は風の吹くまま流されていった。

気球に乗ろう！（後書き）

ライト「っえ！！これで終わり？」

そうだよ！

ライト「え〜」

まあ読者の皆さんに挨拶だけでもしといたら？

ライト「そうするよ！

ボクはピチューのライト！宜しく！！」

ライト「次回をお楽しみに！！」

どこだ？此処は？（前書き）

ライト

「作者！」

ん？

ライト

「一番最初に言う台詞を俺に言わせてくれよう！いいよ！」

ライト

「よっしゃ〜！」

では第二話をどうぞ！」

どこだ？此処は？

「お……て、…きて、お…きて！」

「ななな！？喰らえ『アイアンテール』！」

大声で起こされびっくりしたのか、起きた瞬間にアイアンテールを起こした相手に放つ

「ぐへえ！」

軽く10？ぐらい吹っ飛び吹っ飛んだ起動上にあつた岩を破壊した

「っあ！わりい、わりい」

吹っ飛ばした相手の方に駆け寄り、謝った

「『わりい、わりい』じゃないよ！せっかく砂浜に倒れていた君を気遣って起こしてあげたのに、ありがとうの代わりにアイアンテールを出すなんて（泣）」

10？吹っ飛ばしたライトも凄いがコイツの生命力はもっと凄いらしいまだピンピンしている

「それよりお前はなんて名前だ？」

「僕？僕はフシギダネのグリーン」

「俺はピチューのライトだ！気球に乗って旅をしてんだ！」

「なんで、旅をしているの？」

グリーンが聞いた

「それは、世界中のいろんなポケモン達と会って、世界中の美味しい食べ物を食べる為だ！」

実はもっと重大な理由があるのだが今は伏せておこう

「……………」

今のライトの発言に呆れてしまつて言葉を失うグリーン

「そうだ！！この島はどこだか教えてくれない？」

「っあ、いいよ！ここは『アース島』だよ！

この島の案内をするからついて来て！」



三分ぐらい歩くと町に着いた

.....

数十分かけてこの町を案内し最後にグリーンは自分の家にライトを招待した

「ここが僕の家だよ！」

グリーンとライトは家に入っていった

その二人を遠くの木の下から覗いている者が居たが、続きは又今度  
にしよう！

どこだ？此処は？（後書き）

グリーン

「作者さん！」

何ですか？

ライト・グリーン

「お年玉ちょーだい！」

って、ライトどこから湧いてきた？

ライト

「扉をアイアンテールでぶっ壊して」

マジで！？

.....っあ

ちよっ、お年玉あげるから帰って？

ライト・グリーン

「やった〜！」

うわーどうしよう

扉、吹っ飛んで壁を貫通してるよー？

（あいつ本当にピチューか？）

じ、次回をお楽しみにー

又しても気球に乗って（前書き）

グリーン

「作者さん次話投稿早くない？全回投稿してから一時間ぐらいしか経ってないよ？」

それは、一話、一話が短いからだよ

ライト

「そんな事よりグリーン早く、早く」

グリーン

「わかったわかった」

ライト＆グリーン

「第三話をどうぞ！」

又しても気球に乗って

「うめえ〜!」

ライトが目の前に並べられた食べ物をはっぱりながら言う

「そう言ってくれると嬉しい」

グリーンの父親、フシギバナが言う

「ところで、グリーン

この辺りで右の頬に傷があるライチュウを見なかったか？」

「見てないよ。どうしてそんな事聞くの？」

「あの〜それは〜兄さんが行方不明になったからいるかな〜っと、  
思っ」

「お兄さんが行方不明なんだ…っよし！僕も一緒にお兄さんを捜してあげるよ!」

「本当か!？ありがとう!」

「お父さんいいよね？」

「うーん……お前が行きたいって言うんなら良しとしよう！」

「お父さんありがとう！ライトちょっと待っててね用意して来るから！」

数分後

「お待ちせ！」

ライトと同じように小さい肩掛けのカバンを着けてグリーンがやって来た

「よし！！出発だ！」

そして、さつき居た砂浜にやって来た

「待て！！！」

どこからか声が聞こえてきた

「そのピチューとフシギダネ、金をだしな！」

「えー、やだ〜」

「だったら力づくで奪ってやる！」

草むらから声の主がやって来た

「俺はダーテングのサイズだ！金を出さないんだよな、だったら…」

「遅い！」

サイズが技を出す前に電光石火で後ろに周り込んだライトが言い放った

「『アイアンテール』！」

アイアンテールはみごとサイズの後頭部に直撃、ダーテングを吹っ飛ばした

「雑魚が」

「グリーン！」

気球に乗ろう！」

しかし、グリーンは一瞬の出来事にびっくりして腰を抜かしている

「なんでライトはアイアンテールしか使わないの？」

数分後、やっと立ち直ったグリーンはライトに聞いた

「それは、電気技を使つと反動を受けちゃってダメージ&気絶しちゃうからなんだ！

それより早く気球に乗ろうよ」

「うん！！」

又してもライトは風に身を任せた



又しても気球に乗って（後書き）

ライト

「あーあ作者さん寝ちゃった」

グリーン

「僕達も寝よう！」

ライト

「そうするか」

ライト＆グリーン

「次回をお楽しみに！！  
お休み？」

## 新しい島に（前書き）

ライト

「作者さん書くのはや!」

だから一話、一話が短いからだよ

では、

ライト&グリーン

「第四話をどうぞ!」

## 新しい島に

「ライト！起きて！！」

グリーンがライトを起こそうと大声で呼んだ

「っわあ！なんだ『アイアンテール』！」

又してもグリーンに向かってアイアンテールをお見舞いした

「げふう」

又しても10？ほど吹っ飛ばされたグリーン

しかし今回はぶつかるのが岩じゃなくてたまたま通りかかったバンギラスだった

バンギラスはぶつかった後、5、6？ほど吹っ飛び気絶した

吹っ飛ばされたグリーンは走って逃げてしまった

（あいつ、よく生きていられるな…）

グリーンの後を追いつながらライトは頭の片隅で考えるのであった…

「ふう、疲れた」

ライトはグリーンを追ってやって来た町に居た

そして近くに居たゴローンに話しかけた

「此処はなんて言う島？」

「此処はロッキー島だ！此処に来るの初めてだろう？案内してやるよ」

一通り案内して貰った後おすすめのお店に案内してもらった

「うまい！」

厳選された木の実を使った木の実のソーを食べながらライトとグリーンは言った

「そういえば今日の夕方からバトル大会があるんだって出ようよ！」

「いいぜ！」

「じゃあ、参加するために参加者登録をしにいこう！」

お会計を済ませて会場に走って向かった

「ライト様とグリーン様ですね？タッグバトルに登録しました。大会が始まるまで控え室でお待ち下さい」

「グリーンが相手を足止めして俺が吹っ飛ばすっていう戦略でいいな？」

当たった相手がかawaiiそうだなと思ったグリーンであった

新しい島に（後書き）

……もう限界

バタリ

ライト＆グリーン

「っあ」

ライト＆グリーン

「合掌」

って、人をかってに殺すな！

## バトル大会で父さんに（前書き）

初めて千文字以上書きました！

## バトル大会で父さんに

バトルの相手が決まったと聞いてライトとグリーンは相手を見に行  
った

「っえ！一回目に勝負かつで、相手がサイホーンとテッカニンのペ  
アか、じゃあグリーンはサイホーンをテキトーに葬っておいて、俺  
はテッカニンを殺しておくから」

「葬っておいてってなんですか？」

「ん？そのままの意味だけど、何か？」

グリーンは身震いを抑えながらバトルフィールドにつきバトル開始  
の合図を待った

「これより第1回戦を始める！ヨイ始め！！」

「おい、チビちゃん達で勝てるのかなあ？」

始まってそうそう相手のテッカニンが挑発してきた

「喋っているとやられるぞ『アイアンテール』！」



一瞬でテツカニンの後ろに周り込むとアイアンテールを放った

「ぐはあ！」

テツカニンは仲間のサイホーンに向かって吹っ飛ばされ

テツカニンはサイホーンまでを巻き込み両者は戦闘不能になった

「テツカニン、サイホーン戦闘不能！よって勝者ピチュー、フシギダネ！」

会場全体が静まり返っていたこの勝者がたったの数秒で終わったのもあるが勝ったのがサイホーンやテツカニンではなく、ピチューが勝ったからである

第2回戦目はカイリキーとハリテヤマというなんかゴツイペアであった

この勝負も一分も掛からずに終了した

「なあ、グリーン？敵が弱すぎるな」

「はあ！？」

ライトの意味不明な発言に答えられないグリーンだつて、あのゴツ  
いペアは第1回戦でレアコイルとマグカルゴのペアを開始三分でぶ  
つ倒した優勝候補のペアだったからだその前にグリーン自身は第1  
回戦も第2回戦も立って居るだけだった

「なあ、グリーン第3回戦はルカリオとハッサムのペアだつてさ、  
どう思う?」

「どう思つて、そのペアは去年の優勝ペアだよ!」

「ふーん」

「反応薄っ!」

「っお、始まるみたいだぞ」

グリーンのツツコミもむなしく無視されてしまった

二人がバトルフィールドに着くとバトルが始まった

「降参するなら今の内だぞ!」

ルカリオが口を開いた

「だから喋ってる暇があれば周りに気を配れ！！『気合いパンチ』」

「なに！？『まもる』！」

ルカリオは瞬時に対応して『まもる』を使った

「遅いな『フェイント』！」

「ぐっ！」

「『ソーラービーム』！」

太い光線が走った！見るとハッサムが倒れていた

「ハッサム戦闘不能！」

「『葉っぱカッター』！」

グリーンの放った葉っぱカッターはルカリオに直撃した

「ッち！」

ルカリオは短く舌打ちをした

「おっと、そつばかりに気を取られているとやられますよ『アイアンテール』」

ライトはルカリオがグリーンに気を取られている隙に顔面にアイアンテールを放った

ルカリオは地面に叩きつけられると気を失った

「ルカリオ戦闘不能！よって勝者ピチュー、フシギダネ！」

観客席から無数の拍手が起きる

「ねえなんでライトは気合いパンチやフェイントが使えたの」

「嗚呼、それは近所のカイリキーおじさんにみっちり練習させられたからだよ、格闘技ならほとんど使えるぜ」

「へえ」

改めてびつくりするグリーンであった

「確か次が最後のバトルだったな、ん？相手がライチュウとカメツクス？やべえ」

「ん？どうしたの？」

「な、なんでもない」

明らかになんでもなくないがまあいいや

バトルフィールドに立つとすぐにバトルが始まった

「っあ！やっぱり父さんが相手は」

「ライトか決勝戦の所にピチューって書いてあって半信半疑だった  
がやはりお前だったみたいだな！」

「無駄話もそこまでだ『気合いパンチ』！」

「そうきたか、だったら『雷パンチ』！」

「残念でした今のは囮、『まもる』」

「っな！？」

「父さんだからって容赦しないぜ『アイアンテール』！」

ライトはまもるを使って隙を出させてアイアンテールをぶち込んだ

「ぐっ！お前の攻撃は一発、一発が重いからなしかしこの勝負こつちが勝った！タッグバトルってことを忘れているだろうそろそろカメックスがフシギダネを倒して来るはずだ」

「おっとそれはどうかな？あいつは俺の本気のアイアンテールを受けても平気だからなそろそろ例のが来ても良いんだけど」

「『ソーラービーム』」

「ぐはぁー」

「カメックス！？大丈夫か？」

「カメックス戦闘不能」

「マジですか？これ？カメックスやられちゃったよ！？」

「だから容赦しないって言っただろ？なあ、グリーン？」

「まあ」

「喰らえ！対父さんのために考え出したこの技を『ロックバースト』！」

ライチュウ（父）に土の柱が何本もぶち当たってライチュウ（父）宙を舞って地面に落下してきたそしてそのときにはもう力尽きていた

「って勝手に殺すな！」

バトル大会で父さんに（後書き）

僕は轟さんとコラボします!!

ライト

「なんでなんで？」

それは僕と轟さんはリアとフゴフゴ

グリーン

「次回をお楽しみに！」



ライト達がどこかに行っちゃいました(前書き)

ライト

「轟さんの所に遊びに行ってくるね」

ハア？

グリーン

「行ってくるね」

お、おい！！  
言っちゃった……

ライト達がどこかに行っちゃいました

えーとですね、ライト君とグリーン君達が轟さんの所に遊びに行っちゃったんで、物語が進められなくなりました。

そう言う訳でライト君とグリーン君の過去や今までの中で出できたポケモンのプロフィールなどを語って行こうと思います

又、登場人物が嫌になる位少ないので次に仲間に入れて欲しい又は、出て来て欲しいと言うポケモンを大募集しています！メッセージに出来て欲しいポケモンを書いて、送って下さい！お願いします

「今回はそれで終わりか？」

えーと、あんた誰だっけ？

「自分で出しといて忘れるな！！ライトの父親だ！」

っえ！？死んだはずの？

「ん？そう言えば足の感覚が無いような……って、違うわ！それよりはまだ生きとるわ！」

まだ成仏していなかったのか……で、どんな心残りが？

「うむ、実は息子が……って、なに言わすんじゃ!!」

『なに言わすんじゃ』って、あんたが勝手に言っただんでしょーが！

「うう、ま、まあ話を変えましょう、ライトは『ロックバースト』を使ったのに何故、土の柱が出たんですか？」

えーと、それはですねーバトルフィールドの地面がサラサラの土だったからです、本来ならば地面から岩を出して当てるはずだったんですが、岩がなかったらしいんです

「ほ」

なんかここで話のもなんですから、ちょっと飲みにも

「おー良いですね!!行きましょう」

皆さん今回はこれでお終いです!次回をお楽しみにー

「おい!!早く行くぞ!!」

っあ、待って下さい！

サヨナラ？

ライト達がどこかに行っちゃいました（後書き）

ちょっと飲み過ぎました……

ウィー

気持ち悪いのでサヨナラ……

## テキストプロフィール（前書き）

ライトの父

「五百文字ってなんだ！」

皆さんにお願いです！

アンケートに答えて下さい！

ライトの父親

「厚かましいにも程があるぞ！『ボルテッカー』！」

生身の人間にそれはないって！ねえ、話ばわかる！止めろ、ギャー  
ー

ライトの父親

「第7話をどうぞ」

## テキストプロフィール

おはようございます！たとえそちらが夜だとしてもおはようございます！私の朝は一口のヨーグルトから始まります！

さつそくですが、まだライト達は帰ってきません！しかも私未成年です！前回ライトの父に無理やり飲まされて気持ち悪いのでございます！

では、今まで登場したキャラクターのプロフィールを語っていきましょう！

### ライト

この物語の主人公

年齢は、なんと七歳！

性別は

得意な技はアイアンテール

自分流の技をいくつも持っている

みんなに一言　いないのでなし！

グリーン

主人公の相棒：かもしれない。

年齢は七歳！

性別は

得意な技はソーラービーム

今までカメックスなどに勝てたのはソーラービームを改良して一度にソーラービームを10発撃てるから。その代わりに溜める時間が長くなっている又、カメックスのハイドルポンプを20発受けても倒れないタフさを持つ

みんなに一言　いないのでなし

サイズ

一回しか出てこない謎の追い剥ぎ、実は吹っ飛ばれた後、帰らぬ人に……

ライトの父親

まだ酔っ払っていて、ポケセンから出てこない



ふー、疲れた、今日は終わりです

「ちょっとまでー、いくらなんでもいい加減過ぎる！しかも私の説明はなんだ！酔っ払ってポケセンから出てこないっていい加減過ぎる！」

だって面倒くさい

「面倒くさいじゃねーよ！」

じゃ次回をお楽しみに

## デキトープロフィール（後書き）

ライトの父親

「っあ、あとがきだ、って本当に終わらせやがった！」

やっちゃった

ライトの父親

「ふざけるな！」

わかったから次回ちゃんとやればいいじゃん！

あっ終わらせる

## 今回も短い(前書き)

ライトの父親

「前回の言葉最後まで言わせろよ！」

嫌だ

ライトの父親

「……」

第8話をどうぞ

ライトの父親

「……」

## 今回も短い

「今回はちゃんとやれよ！」

それよりさ、あんた主役じゃ無いんだよね。なんかここぞとばかり出てきてるけど

「ヴウ……」

そつだ！！今から短編書くは！！

「エエ！」

／／／／／／／／／／

「死を支配する悪魔よ我が呼びかけに答え死を与えよ」ブラッドリング」

一人？のポケモンが呪文らしき物を唱えると戦っているらしいポケモンの足元に赤い魔法陣が展開されそこから黒い煙らしきモノが現れた。

その煙は敵のポケモンを包み込んだ。そのポケモンはその場で倒れ激しく痙攣を起こし動かなくなった。

そばに違うポケモンが駆け寄り、倒れたポケモンを揺する

突如、駆け寄ったポケモンの腹から生暖かい液体が溢れ出る、背中には黒い長剣が刺さっていた。そのポケモンは自分の腹から溢れて

いる液体に触った後、それを見つめた沈黙が流れる、刹那そのポケモンは悲鳴をあげたそして崩れ落ちるように倒れた。

/ / / / / / / /

ふうー

「いや、ふうー、じゃないよ!」

じゃあ終わりです!次回をお楽しみに!

今回も短い（後書き）

ライトの父親

「毎回毎回いい加減過ぎる！」

次回はいい加減にやりませんよ！

ライトの父親

「次回をお楽しみに」

帰って来たか！（前書き）

ライトの父親

「日に日に文字数が…」

帰って来たか！

ライ父

「ライ父ってなんだよ！」

いやー短くしただけですよ

ライ父

「……ハア、それより、前回の短編、少しカオスな感じだったけど物語と関係あるの？」

いや、一切関係無し！

ライ父

「！？」

実はあの時寝ぼけて書いたから記憶が一切無いんだよね

ライ父

「それに今気づいたんだけど脱線が激しくない？もう、ただの漫才じゃん。ジャンルをコメディにした方が……」



ツギク！（痛い場所を突かれたな……）  
うん……そろそろ頑張って書かなきゃ読んでくれる人がいなくなっちゃうから！

ライト

「ただいま〜！」

お！帰って来たか！

ライ父

「ライトちよつと来い

お前勝手に家から抜け出したから怒られないように逃げたんだろ！」

ライト

「やべー！『ライトニングボルテッカー』！」

ライ父

「何故？電気技を使えるをだ！？」

グハ―！」

ライト

「理由を知りたい人は轟さんの所へGO！」

サヨナラ！

〃  
〃  
(  
・  
|  
・  
)

帰って来たか！（後書き）

次回から本編に戻ります！電気技を使えるようになったライト君、  
これからの活躍をお楽しみに！

ライト

「頼んだぜ！！」

ストーリー再開！（前書き）

ライ父

「本当に文字数すくねいな」

すいません（-o-;）

## ストーリー再開！

「ライト、家に帰るぞ」

ライトが帰って来て1日目の朝にライ父が言った

「嫌だ」

「凄い、簡単な返事だな…まあ、良い俺とバトルして勝ったらお前を家に連れて帰らないでいよう!!」

「バトル大会で負けた奴がよく言うよ……」

「……」

当たり前的事を言われ言い返せないライ父

「あん時はあん時、今は今だ！バトルをするぞ！」

苦し紛れの言葉を吐く

「仕方ないな」電気技も使えるように成ったこと練習がてらにいちよやるか！」

「容赦しないからな！」

「同じような事を前回言われたような…」

「もうバトルは始まっているぞ『ボルテッカー』！」

「いきなりそんな大技だしていいのか？『メガトンパンチ』！」

ボルテッカーとメガトンパンチがぶつかり合い爆発が起きる！

「ぐは！」

爆発の衝撃で吹っ飛ばすライ父

「これで最後だ！『雷電』！」

普通の雷の10倍はあろう電気がライ父に落ちる

「っがは！」

しかし、まだ行ける！」

「まだ倒れないのかよ!」

そのとき、崖の上から岩が落ちてきた

「危ない!『アイアンテール』!」

岩はその一発で砕ける

「サンキュー!!フォース!」

「弟が死にそうだったから助けただけだよ」

フォースと言われたピチューが答えた

「まだバトルは終わっていないぞ!」

なんとも空気の読めないライ父だ

「『アイアンテール』」

ライトのアイアンテールがライ父の顔面にクリーンヒットきれいな弧を描いて吹っ飛ぶ

「ひでぶ!!!」

ライ父はポケセンの壁にぶつかり意味不明な声を上げた

そして、ライ父がポケセン送りになったのは言うまでもない……



## ストーリー再開！（後書き）

フォース

「はじめまして！！」

フォースです！

実は僕は一回だけ本編に出ていたんです！

第1話の後書きのライトの自己紹介は僕がしていたんです！  
これからよろしく！」

サヨナラ！

新しい仲間？（前書き）

ライ父

「よし！今日もがんばるぞ！」

お前さ、いつの間にか前書きのスタメンだな

ライ父

「気にするな！」

今回は作者が発言する部分が多いです

ライ父

「では、どうぞ！」

新しい仲間？

「勝ったから、旅を続けるからな！」

ライトがライ父に言う

定着したんだ この言い方…

「待て！！」

頭を包帯でぐるぐる巻きにされているライ父が言う

余談だが、バトルの後、ポケセンの看護士にこってり絞られたのは言うまでもない

「なんだ？もう一度アイアンテールが喰らいたいのか（笑）」

「い、いや、違います」

ライトの尻尾が銀色に輝き始めたのを見て、必死に弁解している  
こんなのが父親で良いのか心配にもなってきます

「だつたら何なんだ？」

「これを持って行きなさい！」

ライトは2500ポケを手に入れた

「サンキュー！！じゃあ行って来るわ！」

「待て！！」

「さっきからなんだよ！」

「俺も連れて行け！！」

うん、お金渡して着いて来るってどんな神経してんでしょう、意味が有りません、しかも父の威厳がさっぱりとなくなっています

「」「」  
「」「」

返す言葉が見つから無い三人（ライト、グリーン、フォース）  
気まずい空気が流れる……

「」「怪我はどうすんだ！」「」

「っあ……ま、まあどうにかなるさ……多分」

「その多分が……」

ポツリとグリーンが呟く。

そして、数日後……

「俺、復活！」

本当に大人なんでしょうか？子供じみた発言です

「「「……」」」

またまた、しらけてしまいました。

「俺もう駄目だ……」

落ち込むライ父、新しい仲間？が入ったライト達は今回からは楽しい旅になりそうです！

「っあ!!」

「どうした？」

「気球にこんな人数乗れなくね？  
って言うよりフォースはいつの間に着いてくる事になったんだ？」

「いーじゃん、いーじゃん」

「でも、気球どうすんの？」

「気球、乗らなくて良いじゃん！」

「っあ、確かに！それ良いよ！ナイス！！フォース！」

良くない、良くない！

タイトルに『気球に乗って旅します』、的な事書いてあんのに！

「よし！これからは、歩いたり、船に乗ったりしよう！！」

話、無視された……

新しい仲間？（後書き）

フォース

「次回をお楽しみに！！」

ふー、仕事が終わった

これで作者から金が貰える（笑）」

## 二度目のバトル大会（前書き）

ライ父

「おい！作者！フォースは金を貰っているのに何で俺は貰え無いんだ！」

それは、フォース君に無理やり頼んだからであって、ライ父は勝手に登場しているからだよ！

ライ父

「しかしずるい！」

「っあ！！作者がいない！ハテは、逃げたな！では、どうぞ！」



## 二度目のバトル大会

「次はどこに行くの？」

「さあ、決めて無い」

「……」

「決めて無いのか、じゃあ、次にバトル大会があるオキシ島にでも行くか！」

ライ父が言う

「バトル大会！よっしゃ！行つてやる！」

「ライト、兄さん探しはどうするの？」

「そんなん後回しだ！待ってるバトル大会！」

「……」

「そうそう、バトル大会で三回優勝した者はスクランブルタワーに

参加できるらしい」

何故かライトをあおるライ父

（スクランブルタワーとはバトルタワーみたいな所である、唯一違うのはバトルがスクランブルバトルで戦う所だ  
又、スクランブルバトルは一つのバトルフィールドで複数のポケモンと一緒にバトルするバトルの事である。  
説明が長くなったので本文に戻ります）

「なんか燃えてきた〜！よし！早速オキシ島に向かうぞ！」

数日後

「おー、ここがオキシ島か〜」

「水タイプのポケモンがたくさん居ますね〜」

「じゃあ、バトル大会にレッツゴー！」

数分後バトル大会の会場にやって来た四人

「すみません、バトル大会に出たいんですけど」

「バトル大会の参加者ですね？バトル大会は六人パーティーの勝ち抜き戦です」

「すみません、俺達四人しか居ないんだけど……」

「六人じゃ無くても参加出来ますよ？」

「少し不利だけど……まあいつか！  
名前を記入して……はい！」

「あの、チーム名も書いて戴けますか？」

「チーム名か……よし！槍雷、チーム槍雷です！」

「チーム槍雷さんですね？参加ありがとうございます。バトル大会は1日後に始まりますので、この島の観光をしたらどうですか？いいスポット紹介しますよ？」

「本当ですか？ありがとうございます！」

その後、仲間と、教えて貰った観光スポットを周っていた

「なあ、ライト？バトル大会の事を詳しく教えてくれないか？」

「OK!!」

まず最初に今回のバトル大会は六対六の勝ち抜き戦だ、また、バトルは第四回戦あるから出場チームは十六チームだ！そして、俺達のチーム名は槍雷だ！」

「待てライト、今六対六の勝ち抜き戦って言ったな？」

「ツギク！」

「どうしてくれてんだ！こっちが不利だろ！」

「まあまあ、いーじゃん別に」

「良くないわ！」

こんな会話をしながらスポットを周り終え、ライト達は宿に泊まっていた

「明日のバトル楽しみだな！」

「うん！―久しぶりのバトルだな」

「なあ、グリーンはどうだ？」

「僕は別に楽しみでも無いし、嫌な訳でもないな」

「フーン」

「じゃあ明日のバトル大会に備えて早めに寝るか！お休み！」

「お休み」

「お休み！」

「みんなお休み」

電気が消されライト達は夢の中におちていった

ドードリオの鳴き声でライト達は爽やかな朝を迎えた

「ふー、よく寝たな！」

「オハヨー」

「んー、まだ眠い…」

「朝か、おはよー」

ライト達は朝食を済ませてバトル大会の会場に向かった

「えーと、俺達が最初に当たるチームは、チーム深蒼か、どうやら水タイプ中心のチームらしいな！」

「だったらこっちが有利だな！そうだな、グリーン！最初にお前が行け！！」

「え！？」

「グリーン頑張ってね〜！」

バトルフィールドに無理やり押し出されるグリーン  
グリーンはバトルフィールドについた

「今からチーム槍雷とチーム深蒼のバトルを始める。  
バトルスタート！」

相手はオーダイルだった

「小さいからって容赦しないぞ！『ハイドロポンプ』！」

グリーンは避けようとせずに太陽エネルギーを吸収し始めた  
オーダイルの放ったハイドロポンプが直撃するが無反応でいるしか  
も動く事もせず太陽エネルギーを集めている

「おいおい、動かなくて勝てるのか？『ハイドロポンプ』！」

二度目のハイドロポンプも直撃するが動こうとしない

「『ハイドロポンプ』！」

もう、普通のソーラービームなら放てる程太陽エネルギーを吸収し

ているはずだが、まだグリーンは動こうとしない

「まだ倒れないのか？『ハイドロポンプ』！」

その時だった

「これで勝つ！『ソーラービーム・改』！」

普通のソーラービームの十倍はあろうソーラービームがオーダイルに迫る

「う、うわ！」

避けようするがハイドロポンプを放っていたのと、いきなりだったのでオーダイルに直撃、そしてその一発でオーダイルは戦闘不能となってしまった

「ふー、疲れた」

「オーダイル戦闘不能フシギダネの勝利！」

その後もグリーンが敵を圧倒しライト達の勝利となった



## 二度目のバトル大会（後書き）

あのソーラービーム・改がグリーン君の必殺技だよ！

ライ父

「あんなの喰らったら一溜まりもないな！」

次回もお楽しみに！

フォース

「皆さん！感想や評価待ってます！」

## キャラクター紹介（前書き）

今回はバトル大会の途中だけどキャラクター紹介します

ライ父

「いい加減な作者だな…」

## キャラクター紹介

今回はキャラクターの紹介をしていきましょう！

ライ父

「前回やったじゃん！」

あれは、見てわかるように意味不明な部分がありますからね

ライト （ピチュー）

この物語の主人公

実は三男である

何よりもバトルが大好き話し方は少々乱暴

ケタ違いに強い

つい最近電気技が使えるようになった。

又、格闘技ならほとんど使える

一人称は 俺

グリーン （フシギダネ）

ライトの相棒、かもしれない

控えめな性格

耐久力がハンパない

自分で作ったオリジナル技の威力もハンパない

一人称は僕

ライ父 （ライチュウ）

ライトの父親

ライトの父親だが立場が危ない

しかも、ライトより立場が弱い

ライトよりは弱い

少し子供じみている

主に作者とのツツコミ役前書きではスタメンになっている

一人称は俺

フォース （ピチュー）

ライトの兄、次男であるおっとりとした性格

弟のライトを守ってあげたりとやっぱりお兄さんだなと思え所がある

ライトの数倍強い

ライトより多くのオリジナル技を保有している

一人称は僕

ライト達兄弟はバトルになると別人のように性格が豹変し言葉使いも荒くなる

終わった！

ライ父

「やけに少ないな」

仕方ないだろ出て来てるキャラクターが少ないんだから！

## キャラクター紹介（後書き）

次回からはバトル大会に入ります！！

ライ父

「燃えてきた〜！」

## バトル大会二回戦（前書き）

ライ父

「今回も長めだな」

バトルシーンがあるとやっぱり伸びちゃうね

ライ父

「俺は活躍しているか？」

うーん、キャラが変わる

ライ父

「だけ？」

うん！！でも君には大きな一歩だと思うよ

ライ父

「俺って、一体……」

フォース

「では、第十四話をどうぞ」





## バトル大会二回戦

バトルを終えて自分チームの控え室に戻ってきたグリーン君

「勝てた〜、」

「グリーン君って凄いね〜。あんなの見たこともないよ〜」

「それよりさ、次に当たるチームはどこになるか観戦しに行こうぜ  
！」

「確かに、相手を知ること大切だからな！」

珍しく、「ごもつともな発言をするライ父

バトルを見に行ってみるライト達

「ふーん、『獄炎』とか言うチームと、『インパクト』とか言うチームのバトルか」

バトルは獄炎のヘルガーがインパクトのカイリキーを圧倒的に押し

ていた

「っち！『クロスチョップ』！」

カイリキーがクロスチョップを放つが難なく交わされてしまった

「『火炎放射』！」

ヘルガーがカイリキーに火炎放射を放つ

「っグフ！」

カイリキーはそれで倒されてしまった

「カイリキー戦闘不能！よって勝利チーム、獄炎！」

会場が声援を上げる

「なあ、フォース、あのチームはよっぽど強いみたいだな、」

「うん、カイリキーがクロスチョップを放った後の僅かな隙に火炎放射を的確に決めているからね」

「それにしても、次にあのチームに当たるとしたらグリーンは不利になるな…」

「大丈夫だろ！俺達が倒せば良いんだから！」

「そんな事を言ってもな…」

「よし！！次は俺が出る！」

「待てライト、この勝負は俺が出る！」

ライ父が生まれ変わったかのようにキャラが変わっている

「じゃあ、控え室に戻って、次のバトルが始まるのを待つてようぜ！」

控え室に戻ってきたライト達

「そろそろ始まるな！ワクワクするぜ！」

後、親父！負けるなよ！負けたら承知しないぞ！」

「解ってる！」

バトルフィールドに向かって歩くライ父  
そして、指定された場所に着く  
敵はブーバーンらしい

「始めるてくれ！」

ライ父が言った

「っあ、はい。」

今から、チーム獄炎対チーム雷槍のバトルを始める！バトルスタート！」

「こちらから行くぞ！」雷」！」

しかし、それを難なく交わすブーバーン

「かかったな！」『アイアンテール』！」

いつの間にか、ライ父は雷を避けたブーバーンの真横に回ってアイアンテールを放った

「な、なに！？っグハ！」

後ろに吹っ飛ばされるブーバーン

「まだ攻撃は終わってないぞ『十万ボルト』！」

「グハーーーーー」

十万ボルトをもろに喰らったブーバーンは戦闘不能になった

「案外弱いな…」

その後も順調に勝って行き敵も後二人となった

「次は私の番か…」

ヘルガーがバトルフィールドに着く

「バトルスタート！」

「『アイアンテール』！」

始まったと同時にライ父はヘルガーに走りよりアイアンテールを放った

「ならこちらも『アイアンテール』！」

二人のアイアンテールがぶつかり合った

「つく！」

激しい衝撃に後退するライ父

「油断し過ぎだ『穴を掘る』！」

「っグハ！」

「続けて『アイアンテール』！」

「っぐふ！」

ライ父はヘルガーのアイアンテールを喰らい気絶してしまった

「ライチュウ戦闘不能！ヘルガーの勝ち！」

その後、控え室に運ばれて来たライ父

「すまん、負けてしまった……」

「別に大丈夫だ！俺にまかしな！」

「頼んだ！ライト！」

バトルフィールドに立ったライト

「バトルスタート！」

「まずは俺から『電光石火』！」

姿が見えなくなったライト

「隙あり！『アイアンテール』！」

「い、いつの間に！？っがは！」

「まだまだ！『サンダーアロー』！」

電気で出来た矢がヘルガーに向かって飛んでいく

「『まもる』！」

ヘルガーはまもるを使いサンダーアローを回避した

「待つてました！『フェイント』！」

サンダーアローがまだ終わってない時に来たので下手に避けられずにフェイントを受けてしまうヘルガー

「つぐふ！」

フィールドの端まで吹っ飛び壁にぶつかりヘルガーは戦闘不能となった

「ヘルガー戦闘不能！ピチューの勝ち！」

ライトの勝ちには会場がどよめく、ヘルガーが勝に決まっていると思っていたらしい

「やっぱり、ライトは強いや〜」

控え室に戻ってきたライトに対してフォースが話しかける



「フォースの方が強いんだからさ、そんな事言っなよ！」

「ライト、そろそろバトルが始まるみたいだよ！」

「よし！！頑張るぞ！」

再びバトルフィールドに着くライトは敵を見て言葉を失った

「はぁ？有り得ないだろ……」

なんと敵は伝説のポケモン『ファイヤー』だったのだ

## バトル大会二回戦（後書き）

ライト

「おい！ファイヤーって何だよ！」

いやゝ、出してみようかなゝっと思ったから出した

ライト

「ハア……」

## VSファイヤー（前書き）

ライト

「ガンガン感想書いてくれよ！」

グリーン

「第15話を…」

ライト、グリーン

「どうぞ！」

## VSファイヤー

「こんなの有り得ないだろ……」

伝説のポケモン、ファイヤーを目の当たりにし果然となるライト

「バトルスタート！」

ライトは審判が出した試合開始の声で我に返った

「油断大敵だぞ『火炎放射』！」

「うわ！あぶねー」

ファイヤーの火炎放射をかるうじて避けたライト

「こっちからもやらせてもらうぜ！『雷』！」

ファイヤーは雷を避けた

「まだまだ『電光石火』！『アイアンテール』！」

ライトは電光石火でファイヤーに近づきアイアンテールを放った

「雑魚としてはなかなかだな。しかしそれしきでは、私は倒れん『ゴットバード』！」

「真つ向勝負だ！『ボルテツカー・【火迅】』！」

ライトはファイヤーのゴットバードに対して、火を纏ったボルテツカーを使った

二人の技がぶつかり合い、激しい爆発が起き煙がでる

そして、煙がはれた、

「俺の、負けだ……」

ライトはボルテツカーを使った反動で倒れてしまった

「ピチュー！戦闘不能！ファイヤーの勝利！」

「私をここまで追いつめるとは、なかなかの者だ、しかし、所詮、雑魚は雑魚。雑魚ごときに私は負けやしない」

その発言を聞きライトの兄、フォースがキレた

「あのファイヤー、俺が殺る」

そして、バトルフィールドに向かって歩いて行った

「バトルスタート」

「雑魚は私に勝てやしない」

「そう言って居られるのは今のうちだけだ…」

フォースが消える

「ど、どこえ消えた」

「テメーの後ろだ『アイアンテール』」

「『まもる』」

フォースのアイアンテールをまもるで防いだファイヤー  
しかし、衝撃がくるか顔をしかめている

「ucci、さっさと当たれば楽になれるのに『雷双剣【ツイン・イン  
ドラ】』」

フォースの両手に雷が落ちる、そして、フォースの両手には電気で  
出来た細身の短剣が握られていた

「行くぞ……」

また、一瞬でファイヤーの視界から消えるフォース

「こうなったら『炎の渦』」

ファイヤーは自分の周りに炎の渦を使い、壁を作った

「ふん、こざかしい」

フォースは電気の剣を振り炎の渦の壁を消し飛ばした

「な、なに!？」

「雑魚はお前だったようだな……」

フォースは二つの電気の剣を合わせて一本の剣にし、ファイヤーに振り下ろした

「私の……かんぱ……いのよ……うだ」

「ファイヤー戦闘不能よって勝者ピチュー」

「勝ったのか…」

そう言って、控え室に戻っていった…



## VSファイヤー（後書き）

全国のファイヤー大好きさんすいませんm（――）m  
ファイヤーが悪役みたいな感じになってしまいました…

又、フォースの性格が豹変しましたが、それは後々小説で出すので  
待ってて下さい！

ライ父

「前書きに出てないぞ！」

いきなりなんだ！

物語を書く気が（前書き）

今回は表現描写が無いので、読みにくいと思います

ライ父

「ただ単に、面倒なだけじゃ……」

何か言ったか？

ライ父

「い、嫌何も、16話をどっぞぞ」

## 物語を書く気が

今日は物語は進めません！そして、そのかわりにみんなで遊びましょう！イエーイ、ヤッホー

ライ父

「何なんだ、この作者…ネジが外れたのか！？それより、こんなんで喜ぶ奴は……」

フォース

「やったー！何しようかな？（ワクワク）」

ライ父

「いた…（汗）」

じゃあ、みんなでバトルしよう！

ライト

「なに！？バトル！よっしゃー、やってやる！」

ライ父

「その前に俺の名前を……」

っん？じゃあね、何にしようかな

ライ父

「決めてなかったんかい（汗）」

ごめん、ごめん今は冗談だよ、ライ父の名前はライチでした！

ライチ

「おい！どんな名前じゃ！女みたいじゃないか！しかも、もう名前変わってるし（泣）」

つと言うわけで皆さんにお願いがあります、ライ父の名前を考えて下さい！そして、メッセージなどでその名前を送って下さい！お願いします！

ライ父

「っあ、戻った……」

ライト

「バトルだ！『雷』！」

ライ父

「もう始まってんの！っうわ！あぶねー」

グリーン

「では、僕も『マジカルリーフ』」

ライ父

「一人狙い無しだって『十万ボルト』ふー、うまく相殺出来たみたいだ」

フォース

「っあ！おもしろそー『サンダーレイン』！」

ライ父

「っへ？電気の雨……って、駄目だから、駄目だから（泣）」

おー、本当に電気の雨だなー、小さな雷が雨みたいに降ってるよー

ライ父

「俺は、まだ……やる事……があるの……っガク」

じゃあみんなでいっせーのせ、合掌

皆さん、一分間の黙禱を

ライト

「死んじゃったな」

グリーン

「うん」

ライ父

「まだ生きてるわ！勝手に殺すな！」

うわ！お化けだ！  
逃げろ！

〃 〃  
( < \_ > )

物語を書く気が（後書き）

ふーふーここまで来れば大丈夫

ライ父

「なにが大丈夫だ？」

じゃなかったー

ライ父

「これは罰だ！」  
『雷』

ギャーーーーー

## ライトの特技！？（前書き）

ライ父

「まだ、俺の名前は募集中だぞ！見た人はガンガンメッセージや感想に書いてくれい！」

では17話を

ライ父

「どうぞ！」



ライトの新技!?

「やったな!フォース!」

ファイヤーとのバトルに勝ち控え室に戻って来たフォースにライトが話しかけた

「うー、頭がクラクラするゝ(泣)」

「大丈夫?ちょっと休んでなよ」

「そうするよ」

「なあ、フォース、お前が試合中に使った電気の剣すごかったな!教えてくれよ!」

「でも、今は……」

「兄ちゃん、教えてくれよ」

「っん?兄ちゃん?よし!兄ちゃんが可愛い弟のために一肌脱いで

やる！」

「よっしゃー！」

「フォースって簡単だな…」

と、呟くグリーンであった  
その時アナウンスが流れた、

「今から、三時間の休憩に入ります。」

「っお！ラッキー！」

---

「この技は、使うポケモンで、出せる武器が違っただけ」

ライト達は近くの空き地で技の練習をしていた

「ふーん、じゃあ俺の武器はなんだ？」

「技を出してみないと解らないよ」

「よっしゃ！技を出して確かめてやる！」

「この技の出し方は、両手に自分の中のエネルギーを凝縮し、その状態のまま、一気にエネルギーを手から放出して、形を変える技なんだ！」

「意味わかんねーや」

「……ま、まあやってみた方が解るから…多分」

「つよし！やるぞ」

ライトの手からバチバチと電気が出る

突如、雷がライトに向かって落ちる

そして、ライトは電気でできた鎖のついた鉄球を持っていた（鉄球は宙に浮いている）

「……すごい……」

ライトを含む全員が驚きの声を上げている

しかし、その鉄球は直ぐに消えてしまった

「あゝあ、消えちまった」

その後、数十回試したが消えてしまった

「何か、問題があるのかな？」

「そつだー！轟の所で技を言ってから技を出すと良いって聞いたぞ！」

「じゃあ技名を決めなきゃ」

すぐにフォースが賛成してくれた

「うーん、

『蒼雷球【デスペラードサンダー】なんかどうだ？』」

「おー、良いんじゃない？」

「後、10分で試合が始まります選手は控え室に戻り、バトルの準備をして下さい」

技を試そうとしたがアナウンスによって練習は終わりとなってしまった

「仕方ないな、試合で試そーっと」

「「「ッ  
エエ！」」」

## ライトの新技！？（後書き）

そうそう、今回出た技みたいのを、これからいっぱい出すので、その技、名前も募集します！

ライ父

「俺の名前も募集しているのに厚かましい奴だな…」

良いじゃん、良いじゃん！

ライ父

「良くない、良くない…」

バトル1(前書き)

うーん、うまく書けない

ライ父

「いつもの事だろ!!」

うう(泣)

ライ父

「あーあ、では、18話をどうぞ!」

## バトル1

控え室に戻ったライト達

「なあ、次の大戦チームはどこだ？」

ライトがみんなに聞いた

「っあ……」

「そんな事考えてもなかったよ（汗）なあグリーン？」

グリーンにライ父が聞いた

「えーとねえ、確かチーム『シンオウライフ』だったよ」

さすがグリーン、ちゃんと調べてました

「シンオウライフって、どんな名前だよ（笑）」

「只今から、バトルを始めますバトルにでる代表者はフィールドに出て下さい」

「お！始まったか！じゃあ誰がでる？」



「よし、俺が出よう」

ライ父が言った

「じゃあ頼んだ！」

「只今から、『雷槍』と『シンオウライフ』のバトルを初める、では、バトル初め！」

ライ父の相手ポケモンはガブリアスだった

「まずは、オイラから行くぜい『ドラゴンクロー』」

「『アイアンテール』から、『十万ボルト』！」

しかし、ガブリアスに十万ボルトは当たらなかった

「へっへー、オイラにはそんな技は当たらないよ」『破壊光線』」

破壊光線を紙一重でかわしたライ父

「あぶねー、しかし、破壊光線は出した後に隙が出るのは忘れるな！『アイアンテール』！」

ライ父のアイアンテールがガブリアスに当たる

「痛いな〜、でもオイラはそれぐらいじゃ倒れないよ〜『流星群』！」

ガブリアスの手から無数のエネルギー弾が放たれた

「『まもる』」

ライ父は流星群をすべてまもるで防いだ

「じゃあ『フェイント』」

「『アイアンテール』！」

二人の技がぶつかり合う

「『電気ショック』」

「『スピードスター』」

「だったら『気合いパンチ』」

「オイラは『アイアンテール』」

「まだまだ、いくよー『ドラゴンダイブ』」

「真っ向勝負だ『ボルテッカー』【虎冷】！」

ガブリアスのドラゴンダイブと冷気を纏ったボルテッカーがぶつかり爆発が起きる

「お前なかなかやるな！」

「そちらこそ！」

「これで最後だ『雷放出』」

「それはオイラもだ『彗星群』！」

ライ父の出した電気の波とガブリアスの流星群の強化された彗星群がぶつかり合い激しい爆発が起きた

「「っう！」」

爆発で起きた衝撃波で吹き飛ばされた二人

「俺は限界だ……」

そしてライ父は崩れるように倒れた

## バトル1（後書き）

まだまだ、募集中だよ！

ライ父

「お前、なかなか集まらないからってそれはないだろ」

気にするな！

また！？（前書き）

ライト

「新技つくろー、まず手に電気を流して帯状に放出とつぶん！」

お！これを練習すれば……」

また！？

ライ父

「又かよ」

いや今日は重大な発表があるんだよ

ライ父

「マジ！？」

うん、それはなんと、お前の名前を決めました！

ライ父

「それって、前書きでやればよくね？」

あ……

ライ父

「こんな事してないで、さっさと、ストーリーを進めていればいいものを……」

ま、まあ、名前が決まった事だし、喜びましょうね

ライ父

「で、どんな名前なんだ？」

食用

ライ父

「死にたいのか？」

わかりましたちゃんとやります

ライ父の名前は……………

焼きにくん

「どこまでとぼける気だ？」  
わかった、わかった

ライ父の名前はユウキさんが考えてくれました、『ボルト』です！

他にも名前を考えてくれた方々すいません

食用

「よし、今日からボルトだ！っん、名前が……………」

あっ！間違えちゃったヨイシヨ



ボルト

「お！ちゃんと直ってるな！」

ライト

「新技の練習 『覇雷斬』」

ライトが手を横にふると電気の刃が飛んできた

ボルト

「マジ！？『まもる』」

しかしまもるを簡単に切り裂くとボルトに直撃した

ボルト

「このいうパ…ターン多く…な…いか？ツガク」

あーあ、又倒れちゃった

ライト

「完璧な弄られキャラだな…」

グリーン

「埋葬しなきゃ！」

フォース

「『穴を掘る』！」

この中にボルトを……つと

ライト

「南無阿弥陀仏」

あれ？今回は、起きないね

また！？（後書き）

皆さん、やっぱり感想を貰えると嬉しいですね、だから感想を書いて下さい！

ボルト

「俺の名前にしても、技に関してもこの作者は厚かましいにもほどがある……」

っうわ！出たー！

今回は雑談でしたが直ぐに次話投稿するので、どこまで、ふざけていれば気が済むんだ！とかの感想は無しにして下さいね！  
では！

〓 〓 （ < — > ）

ボルト

「この作者は……ハァー」

## バトル2（前書き）

ライト

「今回は俺が大活躍！」

ボルト

「では、20話を……」

どうぞ！

ボルト

「言いたかったのに（泣）」

## バトル2

「次は俺がでるか……」

そう言いつとライトはバトルフィールドに向かって歩いて行った

「バトル初め！」

審判がバトル開始の合図と共にライトは飛び出した

「相手は弱っている、だったらこれで決めるか…『アイアンテール』

」

ライトはガブリアスの背後を取るとアイアンテールを放った

「な！？つぐは！」

ガブリアスは前方に吹っ飛び気絶した

「ガブリアス戦闘不能ピチューの勝利」

次に対戦する相手になったのは、ピークインだった

「バトル初め！」

「では、私から『攻撃指令』」

たくさんの蜂がライトに向かって突っ込んでくる

「『十万ボルト・界』」

ライトは十万ボルトを自分の周りを囲むように放ち蜂を焼き捨てた

「『毒針』」

ライトはサイドステップで毒針をすべてよけた

「『霸雷斬』」

電気の刃がビークインに向かって飛んで行く

「『まもる』」

しかし、霸雷斬はまもるを切り裂いてビークインに当たった

「きゃあ！でも、大丈夫 『回復指令』」

ビークインの傷を蜂達が直していく

「『雷』」

雷がビークインに落ちて行く

「効かないわよ 『防御指令』」

今までビークインの傷を直していた蜂が雷を防いだ

「こちらも行くわよ 『真空刃』」

蜂とビークインが羽を小刻みに動かし、振動で刃を作り攻撃してきた

ライトはそれを上に跳びよけた

「行くぜ！『蒼雷球【デスペラードサンダー】』」

雷がライトに当たる

そしてライトは電気でできた鉄球を持っていた

「行くぜ！」

ライトは鎖を振り回し鉄球を振り下ろした

「こうなったら『鉄壁指令』」

防御指令の10倍はあろう蜂が集まりビークインを守ろうとした  
しかし、ビークインの必死の抵抗も虚しく、鉄球は蜂の大群を蹴散  
らしながら、ビークインに当たった

「っう！」

ビークインは吹っ飛ばされ壁に激突した

「ハアハア『完全治癒指令』」

ビークインの周りに蜂が集まり始めた

「させない！『霸雷斬』『霸雷斬』」

2つの霸雷斬がビークインに飛んでいく

「『防御指令』」

ビークインは防御指令で霸雷斬を防いだ

「『特攻指令』」

蜂がライトに向かって飛んでくる

「『十万ボルト・界』」

ライトは十万ボルト・界で蜂を防ごうとした、しかし、蜂は十万ボルトに触れると爆発を起こした

「な、なんだこりゃ！？」

爆発によりダメージを受けてしまったライト

「その蜂はダメージを受けると爆発するようになってるの」

「そりゃ厄介だな……」

ライトは突如、自分の持っていた、鉄球と鎖の連結部分を切り離れた電気で出来ているのでそういうことは簡単に出きるのだ

「っほら！プレゼントだ！」

ライトは切り離れた鉄球をアイアンテールで飛ばした



「そんな物『鉄壁指令』」

蜂が鉄球を包み込む

「油断したな！」

ライトは鎖を尻尾に吸収させた

「『アイアンテール』」

電気を纏ったアイアンテールをビークインに放った

「きゃっ！」

ドオオオン！

ビークインは地面に叩きつけられ気絶した

「ビークイン戦闘不能ピチューの勝利！」

「よっしゃー！」

そして、次の敵と戦う為にバトルフィールドに立った……

## バトル2（後書き）

ライト

「そろそろ、バトル大会が終わるな！」

うん

グリーン

「ところでさ、この物語の目的ってなに？ 兄さん探し？ 美味しい物探し？ バトル大会？」

うーん、たしかに、最初とは全然違う話になってきてるよ（汗）

ライト

「いいかげんだな……」

### バトル3（前書き）

今回は笑い有り？涙無しの下らないバトルストーリー

では、どうぞ！

### バトル3

バトルフィールドにレントラーが上がってきた

「バトル初め！」

「手始めに『霸雷斬』」

レントラーは上に跳んでよけた、しかしいきなり、レントラーは地面に叩きつけられた

「どう？高速移動で直ぐに上にいきアイアンテールで地面に叩きつける連続技？痛いだろ？」

「このチビが…『スピードスター』」

ライトはスピードスターを放電を使い相殺させた

「『雷』」

ライトに向かって真上から雷が落ちる、ライトはバックステップで回避した

「『サンダーバード』！」

ライトは電気で鳥を作り上げ、レントラーに向かって飛ばした

「『アイアンテール』」レントラーはサンダーバードをアイアンテ

ールで破壊した

「『気合いパンチ』」

サンダーバードに乗っていたライトは飛び降りると同時に気合いパンチをレントラーに放った

「『アイアンテール』」

ライトの気合いパンチはレントラーの体にレントラーのアイアンテールはライトの体に当たり両者は吹っ飛んだ

「なかなかやるな……」

「そちらこそ……」

突如、レントラーは体をふり、粉を飛ばした

「ウオリヤヤヤヤヤヤくらええい『粉塵爆はあああ』」

レントラーが微力の電気を周りに流すとレントラーとライトを巻き込んで大爆発を起こした

煙が晴れた

「行くぜYO！『アイアンテール』」

ライトがアイアンテールを放つ

「なにおお！『噛み砕く』」

ライトはレントラーの下顎にアイアンテールを当てた

「グヘエエエ」

上空にヨダレを垂らしながら吹っ飛んだレントラー、ヨダレは太陽の光を反射して光輝き、レントラーは白目を剥いていた地面に落下したレントラーは言うまでもなく気絶していた

「レントラー戦闘不能ピチューの勝利！」

ライトはレントラーに勝ったのだが、粉塵爆破の影響でかなりのダメージを受けていた

しかし、ライトは交代しようとはせずにバトルフィールドに残った

### バトル3（後書き）

ボルト

「絶対にレントラーのヨダレはつけ狙いだな……」

グリーン

「うん……」

## バトル最終ラウンド（前書き）

ライト

「バトルに決着が着くんだな！」

うん

ライト

「では、第22話をどうぞ！」



## バトル最終ラウンド

「チーム『シンオウライフ』は残り一人です」

なんと、シンオウライフは雷槍と同じでチームは4人のようだった。

最後の相手はゴウカザルだった

「バトル初め！」

「『蒼雷球【デスぺラードサンダー】』」

鉄球を作り出したライト

「行くぜ」『マツハパンチ』」

ライトは鉄球をぶつけ回避した  
しかし、三回連続で戦闘を行った為にライトは肩で息をしている状態だった

「ハアハア……俺の最後攻撃を見せてやるよ『蒼雷球【真花】』」

ライトが鉄球にエネルギーを流し込むと鉄球に無数のトゲが現れた

「『マツハパンチ』」

「『花雷球【散】』」

ゴウカザルがマツハパンチで攻撃してきた所に赤くなった鉄球をぶつけたそのとたん、鉄球が爆破を起こした  
そして、ライトはその場に倒れた  
フィールドは深くえぐれていた

「ピチュー 戦闘不能ゴウカザルの勝利」

なんとゴウカザルはボロボロになりながらも倒れていなかった

ライトを運び終わったチームメンバーは次に誰が出るかを決める事にした

「僕が行くか……」

フォースがバトルフィールドに出た

「バトル初め！」

「『雷双剣『ツイン・インドラ』』」

フォースは双剣をだした

「厄介なピチュー達だな…『ブラストバーン』」

「僕には勝てない『ギ デイン』」

豪火と白い雷がぶつかり合う

突如、ゴウカザルの周りで爆発が起きた

「どうだい？ 僕のアローレイン・爆はギ ディンを放つ前に出して  
おいたんだ」

爆発でブラストバーンが中断された事により、フォースのギ ディ  
ンがゴウカザルに直撃した

「しまっ、グアアアアア」

ライトの技によりかなりの体力が減っており、ゴウカザルは倒れた

「ゴウカザル戦闘不能！ よって勝者ピチュー、チーム『雷槍』の優  
勝！」

「やった〜！」

いつの間にか回復した（っはや！）ライトが飛び上がっている

その後、表彰を終えたライト達は前回泊まった宿の前に来ていた

「勝てたな…」

「うん、嬉しいな〜」

今回の勝利を喜び合う四人

その時、後ろからゴツい体つきのポケモンが走って来た

「な、なんだびっくりした！」

「ドサイドンのパトリオットと言っものだ、今回のバトルを見て感激した、どうか仲間に入らせて貰えないか？」

「別に良いけどー！」

「本当か！かたじけない」

こうしてなんだかんだで新しい仲間を手に入れたライト達であった。

## バトル最終ラウンド（後書き）

ライト

「パトリオット達と遊びに行ってくるね〜行くぞグリーン！」

グリーン

「ええ！？うわあああ！」

パトリオット

「『穴を掘る』」

床にあ、穴が……（泣）

ボルト

「もしかして、また？」

ライトからボルトへ、ライトの旅「裏」の始まり（前書き）

ボルト

「なあ、288文字って異様に短くないか？」

まあ、新しい話の初まりだからね

ボルト

「そんなんの良いのか？」

ライトからボルトへ、ライトの旅〔裏〕の始まり

ボルト

「ライト達どこに行っただ？」

知らない

ボルト

「ええ〜！作者なのに？」

うん、チート野郎だから、どこに行っても戻って来ると思うけど

ボルト

「待てよ、ライト達が居ないなら俺が主役でいいじゃないか！！」

フォース

「じゃあ、僕は主役の相棒〜！！」

あらら、皆さん乗り気ですね〜（汗）

ボルト、フォース

「では、どうぞ！」

---

ライト達が居なくなっただ後、ボルトとフォースは途方にくれていた

「ハア〜、どうする？フォース？」

「じゃあ、暇つぶしになんでも屋をやって、いろんな人達を助けようよ」

そして、できたなんでも屋『何かが出来る屋!』さあーてどうな事やら、サッパリわかりません



## ライトからボルトへ、ライトの旅「裏」の始まり（後書き）

そろそろ、キャラ投票したら？と言うアドバイスを友達から貰ったので今回からキャラ投票を初めます！

どうか、皆さんキャラ投票よろしく願いします！

依頼だ、依頼！（前書き）

フォース

「今回も少ないな」

いつもの事じゃないか！！

では、第24話を

フォース

「どうぞ」

依頼だ、依頼！

『何かが出来る屋』どうみても、怪しいネーミングのこの店はあつという間に街の話題にな……らなかった

「うう、名前が適当過ぎたかな、誰も来ないよ」（泣）」

「確かに、誰も来やしないな」

その時

カラン、コロン

どこかの『バー』っか！なんて言う突っ込みが飛んできそうな音を出して扉が開いた

「どうも、ありがとうございます」

「おい！帰んのかよ！！」  
二人はつるつとずっこけた

「冗談、冗談、実はお願いがありました」

「お願いってなに？」

目をキラキラさせながらフォースが聞く

「（汗）実は、断崖絶壁に生えていると言われるサカス草を採ってきて欲しいんです…」

サカス草とはどんな病気にも効く幻の薬草だ

「なんでそんな物を？もしかして、お母さんかおばちゃんが不治の病だったりするの？」

「いえ、お母さんは元気だし、おばちゃんは毎朝10キロのランニングをするほどピンピンです」

「じゃあ、」

「いえ、おじいちゃんや妹でもありません」

ポルトが言う前に回答した依頼人

「うー（泣）じゃあなんでサカス草を？」

「いや、ちょっと金儲けを…」

「はい、帰れ」

ポルト達のなんでも屋は大変なお店になりそうです（笑）

依頼だ、依頼！（後書き）

まだ、キャラ投票は続いていますよー！！皆さんふるって参加下さい！  
キャラ投票で多かったキャラは……

さてさてどうなる何かが出来る屋（前書き）

さてさてどうなる！変な客しか来ない怪しいお店何かが出来る屋

ボルト

「読者の皆さん期待をしない方が良いでしょう」

うるせえ！

さてさてどうなる何かが出来る屋

さてさて今回はどんなお客様が来てくれるのでしょうか？

「前回の客はろくでなしだったし、ちゃんとしたお客さんは来てくれるのかな？」

カラン、コロン

どうやら、客が来たようです

「お願いします！さっきの話を考えてくれませんか？」

体中アザだらけのボツコボツコになったさっきの客でした。どうやらフォース達にやられたようです

「さっきからうるさいな」『ライジングゴッド』

かなりの電圧の電気が客に当たる

「ヒギヤーーー」

黒こげになって、プスプスと音をたてている

「これで、懲りたかな？」

「さあ？わからねー」

その後、黒こげの客をゴミ捨て場に運び捨ててきた

「普通の客は来ないのかな」

突如、扉が勢いよく開いた。そしてそこにいたのは、銀色の毛並みのイーブイだった

「追われているんです！！助けて下さい！」

イーブイが慌てた様子で言う

「わかった！隠れていて」

店の扉が開かれて、ザングースが入ってきた

「おい！ここに居るのはわかってんだ！出てきやがれ！」

「もー、小さい子をいじめるのは良くないよ」  
フォースがザングースに言う

「うるせえ！」

「言ってわからないなら力で聞かせようかな」



「っは！こんなチビにそんな事言われるとは、嘗められたもんだな！  
！良いだろう、前の空き地でやってやる」

空き地にやって来たボルト一行とザンゲース

「ハア、あんまり使いたく無いんだけど『千万ボルト』」

ザンゲースに千万ボルトが当たる  
そのまま、倒れて動かなくなった

「ふー、案外簡単に片付いたな」

その光景をポカンと見ていたイーブイ

「ん？どうしたの？んーと、えーと名前なんだっけ？」

「あ！自己紹介していませんでしたね、イーブイのソウです」

「僕は、フォースだよ」

「俺はフォースの父のボルトだ！」

「ねえ、ソウ君、なんでザンゲースに追われていたの？」

「実は、商品街でさっきのザンゲースにぶつかったらいきなり絡まれて逃げて来たと言う訳です、それに、見てのとうり普通のイーブ

イと違っているので、目を付けられてよく、ああいつぶつになるんです」

「じゃあ、僕達が守ってあげるよ」

「嗚呼、俺も賛成だ！よろしくな！-」

「ありがとうございます！これからよろしくお願いします！」

こうして、新しい仲間、色違いイーブイのソウが新しく仲間になったボルト達、これからどうなっていくのでしょうか？楽しみにしましょう

さてさてどうなる何かが出来る屋（後書き）

ソウ

「皆さんよろしく願いします！ソウです！」

ソウ君はボルト達の中で一番いい子だよ…多分

ボルト

「多分だよ…」

気にするな！

何も無い1日？（前書き）

ボルト

「み、見にくい文章だ……」

小説から抹殺しようか？

ボルト

「す、す、す、すいません」

何も無い1日？

さてさてどうなる、ボルト達！？

ソウ君が仲間になり、一層賑やかになった…訳では無い何かが出る屋

「客が来ないな」

「暇ですね」

「誰でも良いから来て」

「そんな事言ったら、又来たりして、あの客が」

カラン、コロン

「お願いしま……グヘエ！」

本当に来ました（汗）でも今回はボルトのアイアンテールで、すぐにぶっ飛んで行ったけど

「ほ、本当に来るとは……」

カラン、コロン

扉を開けたのは、一人のヨマワルだった

「ここに、ライトって奴はいるか？」

「今は居ないよ」

「そうか……」

そう言うときヨマワルは出て行った

「何だっただろ？」

「知らないな」

「ところでライトさんって誰ですか？」

「っあー！そうか、ソウには言っていなかったな！」

そうして、ライトやグリーンの説明されたソウ

「ふーん、ライトさんはフォースさんの弟なんですね！」

「うん！そうだよ」

こうして1日が終わった

今回のヨマワルは何だったのか？そしてソウ君の実力はいかに！？

何も無い1日？（後書き）

まだ、キャラ投票は行っています

ソウ

「待ってます！」

短いけど、長い話（前書き）

ボルト

「何だこの題名？」

自分でもわからない（笑）

ボルト

「ハア」



## 短いけど、長い話

「うー、まだ眠いよ」

朝一番に起きたのはフォースだった

「ソウ起きてー」

「んー、何ですか？」

「良いこと考えたんだよ」(笑)

「どんな事ですか？」

「あのね、あれをそうやって、あーやって……」

「フッフ(笑)それは面白いですね」(笑)

子供二人は起きていて、一人は寝ていると聞いて思いつく人は思いつきますよね

「ふあ、よく寝たな」

「クスクス……」(笑)

「どうしたんだ？何か顔についてるか？」

「「勿論です（笑）」」

「なにがついてるんだ？」

洗面所に向かったボルトが鏡を見て悲鳴をあげたのは言うまでもない  
そう、顔には油性マジックで落書きがしてあり、その上、頭にヒル  
が大量にくっ付いていたのである

「二人ちよつと来い（怒）」

その後、3時間程度のお説教をされた二人であった

短いけど、長い話（後書き）

ボルト

「なんか、ソウの性格がどんなものかが心配に……」

キャラ投票はまだまだ続きます！

フォース

「次話をお楽しみに」

## お昼のお話（前書き）

ボルト

「俺の扱い酷くね？」

気にするな！

ボルト

「ハア」（泣）

あーあ泣いちゃった（笑）

フォース

「28話をどうぞ」

## お昼のお話

轟の感想を見たらある作者さんにチート集団と書かれているのを見て、そんなにひどいチート集団なのかと思いチートをなんとかしようかなんて………思わなかった今日この頃です  
愚痴ですね………

はい！本題に入りますよ～

---

「今日は客がくるかな」

そう言いながら、椅子に座ったボルト

「痛ったー」

そして、椅子から飛び上がった

椅子を見ると画鋏が置いてあった

「フッフ（笑）」

それを見て笑い出したソウ

「って、またお前かー！」

前回の悪戯がよほど楽しかったのか、悪戯を繰り返しているようです

「これは、お仕置きだ！『アイアンテール』」

「痛いのは嫌いなんで『まもる』」

アイアンテールをまもるで防いだソウ

「生意気な『十万ボルト』」

「だから痛いのは嫌いなんです『サウザントカッター』」

十万ボルトといくつもの真空波がぶつかる

しかし、真空波の数がとてつもなく多かったので相殺されなかった  
真空波がボルトにあたる

「なんで俺は一番弱いんだ……バタ」 （チーン

ボルト撃沈

カラン、コロン

一人のゴースが入ってきた

「依頼がありまして、この頃、私の家に幽霊が出るのです、どうにか出来ますか？」

お前が幽霊だろ！っと言うツツコミは無しだ  
そして返答は……………

「お被いしてもらえ」

いつの間にか復活したボルトがいった  
い、いい加減過ぎる

「そんな事が出来るんですか！ありがとうございます」

納得したー（汗）

「これはお礼です、かなめ石って言う石らしいです」

ゴースはそう言って細長い石を置いていった

「なんだろう、この石」

「さあ」

まあ、依頼は解決？ですね！

## お昼のお話（後書き）

ソウ

「悪戯って楽しいな、楽しいな」

キャラ崩壊に向かうソウはどうなる事やら

フォース

「僕も悪戯やるやる〜！」

完璧に子供だなあ〜

ボルト

「平和だなあ」



ハアゝ

ハアゝ（泣）

ボルト

「作者どうしたんだ!？」

いや、前回のにへんな事書いたでしょ

それがね、ある作者さんからすぐに謝罪が感想に送られて来たんだ

……

ボルト

「それでどうしたんだ？」

誤解をもたれてしまうような、事をしたから、返事をしたけど、せっかく読んでくれているのに、それを裏切るような、事を書く自分はとうなんだろうつて思ってた……

ボルト

「……」

だからさ、そんなひどい自分は『なろう』から退会した方が良かったなって思ってた、第一くだらなさすぎるから、いなくなってもいいし

ボルト

「まて、まてこの小説を読んでくれている人は一杯いるはずだぞ！毎日ユニークは70は超えるんだから、だからそんな事は考えるな！」

その70は毎日更新しているから、いろいろな小説を回ってる人が

たまたまみて行くからいだけだから

ボルト

「おい、おい、いつものポジティブ精神はどうしたんだよ、作者らしくないぞ」

ハァ、もう駄目だ……自分は最悪な人間だ……

ボルト

「このまま行くと、どうなるかが解らなくなるので、さようなら！」

## 謎のポケモン（前書き）

ボルト

「作者あれから動かないな……」

ソウ

「うん……」

## 謎のポケモン

作者復活！

ボルト

「は、早い……」

いや、感想でライトの旅が面白いつて言ってくれた、人がいてくれたから、元気が出たから復活出来たんだ！  
では！

晴れたなら一緒に、明日はきつと前に進め！行くぜ！YO！

---

—— 暗い部屋に声が響く

「ライトを連れて来いといったはずだが、どうして居ないのかねえ？ヨマワル」

「す、すいません！ハイド様。ちょうどライトは不在だったようで……」

「居ないのなら探すべきだろ！」

「……………」

「まあ良からう、ボルト達の見張りを続けるんだ」

「はは！」

そう言うとヨマワルは消えた

---

ボルト達

「なあ、フォース、なんか、どこから見られている気がしないか？」

「ん〜と、その木の後ろかな『斬裂雷！』」

そばにあった木が真つ二つに切られた

「見つかったか……『闇の波動』」

木の後ろに隠れていたヨマワルが飛び出して闇の波動を放ってきた

「はじめまして、そしてさようなら！『サウザントカッター』！」

いきなり飛び出してきたソウが真空波を放った

「はひ！？」

いきなりのことに対応出来なかったヨマワルは真空波で体を切り刻まれ倒れた

「こいつ、糞弱いな……」

「うん……」

「確かに……」

さてさて、このヨマワルは何者なのだ！  
それは次回のお楽しみ～

## 謎のポケモン（後書き）

今、復活してもいつ退会するかはわかりません！

ボルト

「絶対に退会しない気がする……」

## 雑魚ばっか（前書き）

ボルト

「どんなタイトルだよ……」

タイトルは本文にちょっと関係します？

ボルト

「いい加減だな……」

P  
'S

パトリオットが死亡しました

ボルト

「……………」



## 雑魚ばっか

ヨマワルをスマキにしたボルト達、このヨマワルは何なのか!?

「ヨマワルさんよ、なんで俺らの事を覗いていたのかな?」

なんか不良のようにヨマワルに事情聴取をするボルト

「いやあのそのハイド様からの命令で……ハッ」  
なんとも口が軽いヨマワルさん

「そのハイドつつー奴に命令されていたんだな?」

「……………」

「答えろって言うてんだよ!」

ボルトは元不良なのでしょうか?

---

ハイドとか言う奴の所

「おい!ゲンガーよ、どうやらヨマワルが捕まったらしい、ヨマワルとボルト達の排除を頼む!」

「ケツケツケ了解だ!行くぜ部下達!」

ゲンガー達は闇に消えていった

戻ってボルト達の所

「言わないんだな？では、拷問開始！」

「それだけは勘弁を（泣）」

「問答無用！『百万ボルト』！」

しかしその百万ボルトは薄い膜によつつ防がれた

「俺らだぜ」

ボルト達の目の前にはゲンガーと複数のゴース、ゴーストが立っていた（浮いていた）

「ソウは俺とゴース、ゴーストどもをやるぞ！フォースはゲンガーを頼んだ」

「ケツケツケ、『シャドーボール』！」

ゲンガーがシャドーボールを放った

「『霸雷斬』！」

フォースが霸雷斬でシャドーボールを切り裂きゲンガーに直撃した

「チックシヨー『悪のはどう』」

「無駄だよ『サウザントカッター・炎』」

ゴーストもとの勝負を一瞬で終わらしたソウが炎の真空波を放った  
炎の真空波の一部が悪のはどうを相殺ほとんどがゲンガーにあたる

「まだまだぜ」『シャドークロウ』

「懲りない奴『ボルトテッカー』」

ボルトも参戦しボルトテッカーを放った

ボルトテッカーはゲンガーに決まりゲンガーが倒れた

「来る奴全員弱いな……」

あんた達が強いの！

その後、ゲンガー達もスマキにされたのは言うまでもない

P / S

ボルトテッカーはボルトテッカーの間違いではありません

雑魚ばっか（後書き）

ボルト

「ボルトテッカーって何だよ!!」

名前が思いつかなかったからテキトーにつけた

ボルト

「ハア」（泣）

いつもPMA！（前書き）

これからどうなるかがさっぱり解らなくなってきた……

ボルト

「ハア」

いつもPMA！

「今日も客がこねー！！どうなってんだ！はじめてからかなりの日にちたつぞ！」

つえ、ヨマワル達はどうなったかって、それは、そのー、感想書いてくれたらお教えします

\*\*\*

「お前、こつゆつふうに書いても感想書いてくれ無いのを逆手にとつて、理由を書かないなんて卑怯にもほどがある！」

死んだはずの君が何故ここに……

\*\*\*

「説明は後でするちよつとこい！」

ギャー――

---

視点変更

ハアハアハアハア……………

「っち！真っ暗過ぎて右も左もわからねー」

「いたぞー！援軍を頼む！」

「見つかったか…走って逃げるか…」

そう言い残すとポケモンは走って消えていった

---

ボルト達！！

カラン、コロン

「ボルト！お前らしき奴がここに居るって聞いてやって来たぞ」

そう言いながら一人のヌマクローが入ってきた

「おお！ぬまっちゃん」

「ぬまっちゃんはやめろって（笑）」

「ところでどうしてここまで来たんだ？んぬまっちゃん」

「それはだな…っとその前に合い言葉『ただ日々の中で楽しむだけ』っはい！」

「『合い言葉はいつもPMA』」

「OK！」

「実はだな…旅を始めたんだ！」

「大丈夫か？」

「勿論だ！」

「じゃあ大丈夫だな！」

「じゃあな！」

「また合おうぜ！」

これからが全くわかりません！



## いつもPMA！（後書き）

皆さんにお願いです！

悪い点ばかりを一杯かいただけの感想でも良いので感想を書いて下さい

自分のためになるので！改善できる部分は改善して行きます！

ボルト

「待ってるぜ！」

皆さんお待ちかねの……（前書き）

ボルト

「なんだこのタイトル？」

気にしない！

どうぞ！

皆さんお待ちかねの……

さあさあ、皆さんお待ちかねの無駄話！

ボルト

「誰が待ってんだよ！」

フォース

「ハ―イ！」

こいつ

で今思っただけど、フォースのキャラ崩壊、どんどん天然さが激しくなっていく事について話合います！  
どうです！少し真面目でしょ！

ボルト

「どこが……」

しかも今回は只今新しく執筆している小説の主人公とそのお友達にも登場していただきます！

翠波

「シャワーズの翠波です！」

炎斬

「ちーす！ゴウカザルの炎斬だ！」

ボルト

「こんな事していいのかよ……」

フォース

「後輩だ〜！！よろしく！」

何故フォースはキャラ崩壊をしてしまったかを話合いましょう！  
フォースがキャラ崩壊を起こしたのはたしか、轟と二回目のコラボ  
をしてボルトが何でも屋を始めた所らへんからです！

炎斬

「それはただ単に作者があんなことやそんなことを始めたからじゃ  
ね？」

翠波

「絶対に作者が変人さんにおもわれるから！」

ボルト

「作者のスランプが問題だ！……多分」

ん〜それは無いと思う……きっと自分が寝坊ながら書いたからだと思  
う

翠波

「分かってんなら最初からそんなこと言うなよ」  
ではフォースの天然について話合いましょう！

翠波

「どうせ同じ理由だろー！」

ピンポーン！

ボルト

「作者に付いていけねー（　・　）」



皆さんお待ちかねの……（後書き）

ボルト

「で何がやりたかったんだ？」

翠波達の自己紹介

ボルト

「そんなこと違う小説でやれよ！」

良いじゃん良いじゃん！お前達と後輩の顔合わせだと思え！！

ボルト

「ハア」

ライチュウ（前書き）

今回はボルト達は関係なし

ボルト

「出番待ってたのに……」

## ライチュウ

ライトが旅にでる3ヶ月前の話

「うち！どこまでもついてきやがる！」

ある、ライチュウが走りながら呟く

「逃げるのもこれで終わりのようだな！」

逃げるライチュウの目の前にあるポケモンが立ちはだかった

「うつせー！『雷』」

「無駄だ！『ロッキースールド』」

雷は土の壁に阻まれてしまった

「後ろをしてみる」

ライチュウが後ろを振り返ると何百ものポケモンが迫って来ていた

「お前はここで朽ち果てる」

「俺は負けねー！『雷爪【ソー・インドラ】』」

ライチュウの手から電気放出され、長い爪のようになっていた

「ならば『炎剣サラスペンダー』」



電気と炎がぶつからあう

「『雷砲・拡散』」

筋状の雷が周りをなぎはらい一掃する

「『まもる』そして、マルマイン部隊、大爆発！」

ライチュウの周りに集まった数十ものマルマインが一斉に大爆発をした

その爆発は数百キロ離れた町からでも確認されたらしい

## ライチュウ（後書き）

今回のライチュウはキーキャラクターです！覚えておいて下さい！

## 戦い〔前編〕（前書き）

ボルト

「なあ、翠波達の小説はどうしたんだよ！」

気にするな！

ボルト

「気にするよ！」

では

（＾Ｏ＾）ノどつぞど！

## 戦い〔前編〕

今回も謎のライチュウバージョン

ボルト

「もしや遂にネタ切れか？」

ツギク（。。。）ノ

ボルト

「そうだったのか……」  
ソウ

「呼びました？」

名前がギャグだな……今、気がついた……

爆発に巻き込まれたライチュウどうなったんでしょかね？

「うう……」

ライチュウが目を覚まし辺りを見回した、しかしどこを見ても辺りは闇

「此処はどこなんだ！」

闇の奥から、声が聞こえてきた

「目が覚めたようだね……此処はお前が今まで生きていた世界とは、

全く違う」

「じゃあ、どこだ！」

「お前がこの世界にくる直前の事を良く考えてみる」

「この世界にくる前は……っは！！も、もしかして俺は死んじまつたのか？ここは冥界なのか？」

「まあそう言う事になるな、生まれ変わり元の世界に戻るか？」

「ああそうする、」

「しかしだ、生まれ変わると今までの記憶はすべて無くなる」

「待て！！俺には元の世界に弟達と妹、そして親父とお袋が居るんだ！奴らから逃げる事になってから顔も見せてねえんだ！絶対に生まれ変われと言っつのなら俺は今まで通り逃げてやる！」

「逃げたとしても此処は私の世界だどこにいても見つけられる」

「だったら此処でお前を潰して逃げてやるよ！」

「笑わせるな、私は一応神だ神に勝てる訳が無かるう」

「神だろうが、なんだってどんときやがれ！すべて潰してやるよ！」

## 戦い〔前編〕（後書き）

ネタ切れになったので、自分のポケモンについて次回からかいていきます！

ボルト

「次回からかよ！」

## 冥界でのバトル（前書き）

スランプ気味だった時の作品がとんでもないなかった（泣）

スランプから少し回復しました！これから頑張りますよ！

## 冥界でのバトル

今回もライチュウだよ！

「言わせて貰うがこの世界で死ぬとなにもない『無の世界』へと落ちるぞ、それでも戦うのか？」

「もちろんだ！」

ライチュウが威勢良く返事をする

「しかし、いくらなんでも差が大きいな、こんなんじゃ戦っても楽しくはないな」

どうやらハンデをつける気のようにだ

「じゃあ、お前と同じライチュウになり、お前とタイマン勝負といこうかな？」

「なんでも良いからバトルしてくれよ！」

「よし！良いだろう」

そう言い終わると周りが明るくなりバトルフィールドが現れ、ライチュウの反対側にはもう一人のライチュウが立っていた

「ここは私が作り出した架空のバトルフィールドだ！用意は良いかい！」



「おう！」

そう言うとライチュウはもう一方のライチュウに向かって突っ込んでいった

## 冥界でのバトル（後書き）

自分のポケモンについて話をしますわ！

パールで一番最初に選んだポケモンはナエトルでした！

そしてそのナエトルはいま68レベルまで成長しドダイトスになっています！

しかしそのドダイトスは今や放置される運命になったいるのだ！

次回もお楽しみに！

f r e e s p a c e (前書き)

無いんでしょうか？

## free space

お久しぶりです、皆さんがた！やっぱり、こうやって長い間書いてなかったと言うことだから、この小説の作者はとてつもなく良い小説を書いていて作者は

『1ヶ月以上放置していい感じの内容が浮かんだぞーイエーイ』  
なんて事になってるんだろってお思いでしょう？

実はそうなんです！！凄い案が降りて来たんです！！……なんてなる訳無いでしょうか！！

第一書かなかった理由が一つのゲームをこの一ヶ月やりこんでいたんですから！

ボルト

「ん、なこと言っていないでさっさとかいたら（呆）」

な、何故に個々にお前みたいな下等生命体が神である私が作り出した私だけの free space に！？

第一究極さんの所でクイズ大会をやってるんじゃない？

ボルト

「お前が勝手に呼び出したんだろ！！第一下等生命体って（泣）」

あーそうだったよ（笑）

ボルト

「いや笑ってんじゃないくて早く戻せよ！お前が無理やり呼び出した

から来たのが本体じゃ無くて魂だけ個々にきたんだから！（怒）「

ほー、っと言うことは究極さんの所に居る本体は蝉の又ケガラ状態  
（笑）

ボルト

「だから早く戻せ！」

じゃあ皆さん、これから本格的に小説書いて行くんで！じゃあサヨ  
ナラ

〓 〓 （・・・・・）

ボルト

「俺はどうなんだよ」（泣）「

f r e e   s p a c e (後書き)

亡いんです  
漢字が

## ライト達の帰還（前書き）

久しぶりの更新です！

文章力が無いので誰かアドバイスをお願いします！！

## ライト達の帰還

「今日も暇だな」

ボルトに店番を（無理やり）やらされたソウがいつものごとくカウンターにだるそうに座っていた

ガタン！

突如、扉が開く

「俺参上！」

「なぐんだ、ボルトさんですか、でも此処まで放置したんだから何されるか分かってますよね」

怪しい笑みを浮かべならソウがボルトにジリジリと歩み寄っていく

「いや、あの、その……」

「問答無用『アルテマ』！！」

叫び声をあげながら空に吸い込まれるように飛んでいくボルト

「そうそう、俺等が別世界のバトル大会に参加させてもらえるんだってさ！！」

「だったら早速特訓ですね！！」

「でも、FF呪文は使っなよ！」



「分かってるよ！」

そうして、全員が散らばって行った

## ライト達の帰還（後書き）

バトル大会はハーブさんのバトル大会です！

半ば飛び込み参加でしたが受け入れてもらえました！

ハーブさんに感謝です！

## ライトの練習（前書き）

久しぶりの更新です！

今回は轟が手直しをしてくれたので文章が読みやすくなっておりまゝです

## ライトの練習

### ライト編

バトル大会で優勝するためにライトは秘密の特訓場所に来ていた

秘密の特訓場所は巨大な岩が数百個有るだけのサッパリとした場所だ  
早速、ライトは一個の岩の前に立ち、岩に向かって回し蹴りを放ち  
粉々にする

「ふゝ、まあウォーミングアップはこれ位かなゝ……!!」

刹那、後ろから何かを感じたライトはサイドステップでその何かを  
回避する。

そして元々ライトが立っていた所に極太のレーザーが通り過ぎた

ライトは1つの岩を指差しながら言った

「そこのお前！隠れてるのは分かってるんだ、出て来い！」

すると、一人のフライゴンが岩の影から現れた

「僕の『N・レーザー』をよけるとは思った通りただ者じゃ無いね  
（  
じゃあ、これはどうかなゝ 『H・レーザー』……!!」

フライゴンが口から細いレーザーを放つ

「そんなレーザーなんか『雷波斬』!!」

ライトが手を振り電気の衝撃波を放ち相殺させる

「あちゃ〜!!ホーミングレーザーなんだからよけてくれなきゃ!」

「ふ〜ん、だったらよけたらレーザーが追って来るのか……って、自分で技の特徴教えていいのかよ(汗)」

「え!?!あ!口がすべっちゃったよ

そうそう、自己紹介がまだだったね〜、僕はフライゴン!名前は言わない主義なんだ!」

変わった主義を持つフライゴンだ……。

「俺は見ての通りピチューだ。名前はライトだ!ところでお前は俺になんの用だ?」

「ああ!それはある方に君を強くして来いって頼まれたんだ」

(ある方が、どうせ糞作者の野郎だろうな……)

くしゅん!

ん?誰かが噂してるな……。

「で、僕が見たかぎり、君のバトル方針はこり押しで、作成及び戦略は考えずに戦ってる。つまり補助、防御の部分が欠けてるんだ、だから……」

「だからどうするんだ?」

「だから、僕と特訓して防御の技を作りださない?」

「強くなれるなら何でもやってやるよ!」

「よし!そうと決まったら早速特訓だね!」

そう言うと二人は向き合った

「じゃあ、ライトが僕が放つN・レーザーが防げるようになったら特訓は終了、良いね?」

フライゴンがライトに尋ねる

「了解だ!ガンガンかかって来い!」

「じゃあ行くよ!『N・レーザー』!」

(まずは相手の技の威力をみるとするかな)

「『雷波斬』!」

ライトが雷波斬を放ちN・レーザーを相殺させようとする

しかし、

「何!」

雷波斬は威力を減らすどころか簡単に飲み込まれてしまった

「何！？くそ！『蒼雷球【デスぺラードサンダー】』！！」

ズドオオオオオン！

電気の鉄球を横に振りなんとか相殺させる

「ハアハアハア………思っていた以上に威力が高いな  
もう一度やってくれ。イメージが湧いた。なんとか防ぐ技を産み出  
せそうだ」

ライトはレーザーを少し被弾したようだ。息があがっている。

「じゃあ、『N・レーザー』！」

（あんな威力じゃ、固い鉄板の壁を作っても突き破っちまうな、だ  
ったら弾力の有る壁を作って跳ね返してみるか……）

「っは！『電気スパークウオールの壁』！！」

ライトの目の前に現れた電気の壁はN・レーザーを受けた途端に輪  
ゴムを引っ張ったように伸びる。そして、その勢いを逆に利用して  
跳ね返す

「え！？」

N・レーザーに飲み込まれたフライゴンはそのまま空の彼方へと消  
えて行った

「かなり飛んだな〜！ま、まあ俺の新しい技の完成でいいか？」

喜んで良いのかどうか分からない状況に置いていかれたライトであった



## ライトの練習（後書き）

新技サンダーウォールについて

技としてはカウンターやなどと同じ

しかし、サンダーウォールに敵が触れた途端相手に高圧の電流が流れる

サンダーウォールは避雷針の効果を受けない、地面タイプにも効くと言う特徴が有る

ライト

「反則じゃね？これ（汗）」

大丈夫！お前自身が反則だから！

ライト

「そう言う問題か？」

まあ轟！お前は『良いセンスだ』

|| || ( . . )

ソウの……（前書き）

ソウ

「バトル大会？に早く出たいな」

ライト

「早くバトルしたいぜ!!」

俺は会場が壊れないかが心配だ……

ソウの……

ソウ編

ソウ

「作者さ〜ん？」

ん？

ソウ

「今回のバトル大会って、FF呪文禁止なんだよね？」

いや、それ当たり前だから（汗）

ソウ

「作者さんはバトル大会で僕が負けても良いの！〜！」

嫌、負けても良いのって言われても……

ソウ

「負けても良いのかな〜（笑）」 怪しい笑みを浮かべながら作者に近づく

で、でもFF呪文は無しなのは変わらないからね？でもFF呪文の代わりに新しい技覚えさせてあげるから、それ以上近づかないで（汗）

ソウ

「それだけ言うんなら……」

はいいい！！新技作ります、作ります！！

ソウ

「希望はFFの技みたいなのかな、それに馴れてるし」

じゃあ、召還獣という方針で

地面に魔法陣を作り（一瞬で）そこからポケモンを出す

勿論、普通のポケモンじゃありません

魔法陣には水、草、炎、電気、岩、地面、氷、鋼のタイプがあり

水なら、水で出来たシャワーズ

草なら、草で出来たジュプトル

炎なら、炎で出来たりザードン

電気なら、電気で出来たライチュウ

岩なら、岩で出来たサイホーン

地面なら、土で出来たビブラーバ

氷なら、氷で出来たトドグラ

鋼なら、鉄で出来たコドラ

を召還する事ができる

又、出した召還獣を吸収する事でそのタイプのブイズに進化する事ができる

相手に例えばバシャーモがいたとした場合、リザードンの代わりにバシャーモを召還する事が出来る

簡単に言えば相手のポケモンの召還獣を出せると言う事

さらに、召還獣に自分から入る事が出来る入った召還獣はソウ君の  
思いど通りに動かす事が出来て実体化する

弱点は

効果抜群の技を食らうと進化が解ける、

召還獣が食らった場合一発で消滅する

技は普通に使える

又、召還獣は吸収している物、入ってる物も含め二体までである

ソウ君こんなのだっ？

ソウ

「気に入ったからこれが新技だ！」

ソウ君の新技

召還獣【○】

○にはそのタイプが当てはまります

例

召還獣【炎】

です！！

ソウの……（後書き）

適當すぎましたすいませんm（――）m

ソウ

「あやまるのなら最初から書かなければ良いじゃん」

（。°）

## ライト達の旅の始まり（前書き）

更新が遅れてしまいすみませんでした m ( ( m

## ライト達の旅の始まり

ライトは練習を終えて、ボルトの店でみんなの帰りを待っていた

「ふあゝ、作者もこの頃放置気味だしなんか暇だな」

カラン、コロソ

どうやら、ソウが帰って来たようだ

「ライトさん、なに現実的な事言ってるんですか？まあ、その事は僕も否定しませんけどね…」

「おお！ソウ帰って来たのか！！やっぱりソウもそう思つか？」

「うん、作者さんの怠け癖は本当に困りますから……」

などと作者としては聞き捨て難い話をライト達がしていると

ツバン！

扉が勢い良く開きグリーンが飛び込んで来た



「ライト、大変だよ！」

町でライトのお兄さんらしき人物を見た人が居たんだよ！」

「なんだって！？で、その兄貴を見たらしい奴はどこに居るんだ！？」

「ごめん、ライト、ライチュウが謎の奴らに追われていた！！って、言う話を盗み聞きしただけだから、連れてきて居ないんだ、でもライトのお兄さんらしきライチュウはこの島じゃなくて『ヤカテクトリ』で見たらしいんだ！」

「『ヤカテクトリ』この世界の中心の島か……」

ヤカテクトリはこのライト達の世界で真ん中に位置し、大きさも他の島に比べ格段に大きい島である

この世界を収めている機関も此処にある

「兄貴に会えるかどうかは分からねーが、行つて損することはまず無いだろうな！！旨い物が食えたり見たことねえ奴らとバトル出来るだろうからな！！」

「ライトらしいな」

ニコニコ笑いながらグリーンが楽しそうに言う

「よっしゃー！！だったら全員召集だ！」

こうして、その夜はライト達全員が集まり、これからどうするか

会議を始めた

## ライト達の旅の始まり（後書き）

ライト

「よし、旨い物食つぞ」

ソウ

「ライトさん、さっきからそれしか行つてませんよ（汗）」

え！？そうなんだ（汗）

グリーン

「いつになるか解らない次回をお楽しみに！」

始まらない旅（前書き）

ライト

「短い、とても短い！」

いつもの事だ！

ライト

「ハア」……………」

## 始まらない旅

会議の為にライト達はボルトの店に集まった

「『ヤカテクトリ』に兄貴がいるらしいと、言う情報をグリーンが仕入れて来てくれた、しかし、みんなに言わなきゃいけない事がある……」

ライトが少し深刻そうな顔をしながら話し出した

「みんなが集まる前に『ヤカテクトリ』についての情報を少し集めてきたんだ、そしたら俺の兄貴が『God's upper person』と言う謎の組織に追われていたことがわかったんだ」

「ちょっとまって、追われていた？何故、追われている、じゃないんだ？………もしや……」

ボルトが焦りの表情を見せながらライトに質問をした

「………ああ、兄貴はもうこの世には居ないんだ……」

ライトはうつむき、涙をこらえる

しかし、ライトはいきなり顔を上げ元気そうに言った

「だけどな、終わっちまった事だ！気にするこたあ無いさ！！」

いくら悔やんでも兄貴は帰って来ないんだ！………でも、でもなあ兄貴の、兄貴の仇だけは討つ！相手が、どんな理由であろうとな！……」

そこまで言つとライトは大声で泣き出してしまった

「ちくしょう、なんで兄貴だけを、なんでなんだ！ちくしょう、ちくしょう、ちくしょおお！！」

『……………』

みんなはどうしたら良いかわからず黙ったままだった

「やっと見つけたよ…」

君、兄貴だけって言ったね？実は君もその対象なんだ……………」

ライト達が声がしたの方向に振り向いた先には……………」

始まらない旅（後書き）

ライト

「変な終わり方だな……」

面倒なんだもん！

ライト

「こいつ駄目だ……」

なんか言った？

ライト

「なにも言っていないよ」（笑）

サブタイトル？そんな物なくても良いじゃん！（前書き）

今回のサブタイトルを見た人、このサブタイトル、物語の内容と全く関係無いのでご安心を！！

ソウ

「では、どうぞー！」



サブタイトル？そんな物なくても良いじゃん！

声のした方向を振り向いたライト達は手に黒いエネルギー弾を構えた、ヨノワールであった

「君のその力が必要なんだ『シャドーボール』！！」

ヨノワールがライトにむかってシャドーボールを放ついきなりの事であることと自分の兄が死んだ事がショックで反応が遅れ、その場に突っ立った状態のライトにシャドーボールが飛んでくる

「ライト！危ない！」

ライトと突き飛ばしライトの代わりにシャドーボールを受けたボルトが壁を突き破り外に吹き飛ば

「お、親父！」

ボルトを追い外に飛び出すライト

「親父大丈夫か！？」

ボルトを揺さぶるがボルトは反応を示さず、動かない

「お、俺のせいで……」

「ライト！ボルトさんは僕が見るから早く逃げて！！」

「そうです！ライトさんヨノワールは僕に任せて逃げて下さい！」

グリーンとソウがライトに声を掛ける

「俺は、俺はこれ以上仲間を失いたくない……」

そう言つと電気の鉄球を召還する

「俺は何も出来なかった……だから、俺はお前を……潰す……」

店から飛び出して来たヨノワールにそう告げる

「君、面白いね……気に入ったよ『シャドーボール』!!」

ヨノワールはいきなりグリーンに対してシャドーボールを放つ  
ボルトを看病していたグリーンは避ける事も出来ずにシャドーボ  
ールに直撃する

「グリーン！ テメエ、許さねえ!!」

突如、ライトの鉄球の形が変わっていく

「ふふふ、やっぱりあなたでしたか『レジェント・ウェポン・リー  
は……」

鉄球は電気のドラゴン（ドラクエジョーカー2のマスタードラゴン  
みたいな形）へと形を変貌させる

「『アイアンテール』」

「『冷凍パンチ』!! グハア」

ライトのアイアンテールを冷凍パンチで相殺させようとしたヨノワールは予想以上の衝撃を受け少し後退する

「『気合いパンチ』!!」

ヨノワールの際を見逃さず気合いパンチで追い討ちを掛ける

「ッグフ!!」

気合いパンチが腹に決まったヨノワールは10m程吹っ飛ぶ

そして、ライトのドラゴンがヨノワールに向かって高電圧の電気ブレスを放つ

「……これがレジエント・ウェポン・リーのちか『ズドーーーン!!』」

激しい衝撃波で地面が揺れた

そして、煙が引くとドラゴンがブレスを放った所が巨大なクレーターが出来ていた

「ライト!! ボルトさん、まだ息してるよ!!」

どうやら対したダメージを受けていなかったらしいグリーンがいきなり声を上げた

「なんだって!!」

ライト達はボルトに駆け寄った……

サブタイトル？そんな物なくても良いじゃん！（後書き）

ライト

「いつも適当に終わらせやがって（怒）」

ごめんごめん（笑）

ソウ

「それにしても作者さんの文章力って0ですよねなんかすごい読みにくいし……」

自分のキャラにダメ出しばかりされる俺って……（泣）

謎のポケモン（前書き）

ライト

「44が始まるぜ!!」

ソウ

「始まりますよ!」

## 謎のポケモン

「親父大丈夫か!!」

駆けつけたライトがボルトに聞く

「ライト、ボルトさんはまだ気を失っているから……」

「そ、そうだったのか……」

「ライト、後ろ!」

フォースが声を上げる

「っな!」

ライトが振り向いた先には、さっき倒したはずのヨノワールがボロボロの状態で立っていた

「とっさに守るを使っただ、まさか簡単に割れてしまうなんて、しかし君の負けだ」

ヨノワールの拳が冷気を纏い振りがざされる

「後ろがから空きだよ お・じ・ちゃん  
『シャドークロー』!!」

ヨノワールが横にぶっ飛ばされる

「俺を…倒し…て…も意味が…ない…もうお…そい……………」

そう言った後ヨノワールは動かなくなった

「へっへっ！…！どう？私のおかげで助かったでしょ？」

耳に赤い花のアクセサリーをつけたピチューがライトに向かって言った

「お、桜花！なんでお前がここに！？」

「ん？お母さんに頼まれてお父さんを回収しにきたの」

（（か、回収って……））

「でも、来てみたら危なそうだったから助けたの！」

桜花が胸を張りながらライトに話しかける

「じゃ、お父さん回収してバイバイするね」

そう言った後、ボルトを抱えてテレポートらしき技を使って帰っていった

「ねえ、ライト、あの桜花って誰？話からするとライトの妹っぽいけど……………」

「ああ、俺とフォースの妹だ……………」

「そ、その前にライトさん、周りを見て下さい……………」

「ん？」

ライトが周りを見渡すといろんな種族のポケモンに囲まれていた

「街は破壊されてるみたいだし、ヤバイよね？」

「ああ、相当な……」

その直後、雷の様な金色に輝く何かがライト達の目の前に降り立った

「わりい、待たしたなライト、フォース！」

それは全身に雷を纏ったライチュウであった

「ライト！後ろを頼めるか？」

「勿論だ！

おい！！フォース！みんなを頼んだ！俺と「俺は『後で行く！』」

ライトとライチュウはちらつと相手を見て目と目で合図する

「っと！ライト！これを受け取りな！！」

ライトの手に投げられたのは、マチェットと呼ばれる大ぶりのナイフだった

「行くぜ！！」

「任せろってんだ！」



ライチュウは日本刀の様な長めの剣を抜き放つ

「ハイドさんよ！手伝ってもらうぜ！！」

『ハア、全く人使いの荒い奴だな』

謎の声が聞こえたあとライチュウの周りに黒いぼやとした球体が現れるそしてライチュウは敵のど真ん中に突っ込んでいった

## 謎のポケモン（後書き）

桜花はこれからガンガン出て来ます!!

そして謎のライチュウ、だいたいの人は気付いてますよね？

なんか大変に…（前書き）

危ないシーンが……

ライト

「無いけどな！…どうぞ！…」

なんか大変に…

「っに、しても

こんなナイフ渡されても扱いにくいっつの……」

ライトがマチェットを上へ投げながら毒づく

その後、マチェットを逆手持ちにし構え、高速移動でジグザグに走り回りながら、すれ違いざまに切り裂いていった

一方その頃、謎のライチュウは……

日本刀のような刀を巧みに扱いながら敵を切り裂いていた

「つと！」

物凄いスピードで繰り出されたサウムラー回し蹴りを余裕で交わし、そのすれ違いざまに刀を足に突き立てる当然ながら 自主規制

サウムラーはその場に倒れ込み痛さでのたうち回る、そして、その場を離れようとしたライチュウにタネマシガンが繰り出されるそれをいとも簡単に刀で弾き返し、飛んできた方向にナイフを投げつけるナイフは綺麗にジュカインのみけn 自主規制 ジュカインはその場に倒れ込む

「ハイドさん！後は頼んだ！」

『はいよ……』

黒い球体はライチュウに姿を変え他のポケモンと戦いを始めた

カラン、カラン

その直後、ライチュウの背後で何かが地面に落ちる音がした  
ライチュウが振り向いた先にはライトが立っていた

「あ、兄貴……なんでこんな事を……本当に兄貴か？」

ライトは地面に倒れているジュカインなどを見ながらライチュウに  
質問をする

「じゃあ、ライトはさっきのナイフでどうしたんだ？」

「俺は全員、峰打ちだ……さっきのヨノワールにしても、軽い脳震  
盪で倒れているだけだ……」

「そうか、ライト……俺はお前の兄ちゃんだ、真正正銘のな……  
後、俺がこんな事やっているのは、やらなきゃやられるからだ  
あいつ等は俺等を殺す気であって、手を抜くと本当に殺される、そ  
れに俺はもう、一回死んでるからな……」

「やっぱり、兄貴は一回死んだんだ……  
わかったよ、兄貴

でも、自分が殺すなんて事は……」

「考えられない、だよな……  
俺も最初そうだった、だからあいつ等から逃げていたんだ、一回死  
んだ後になって……  
ハア、俺って、惨めだよな……なんか、自分に笑えてくるよ……」

「そうか、兄貴、変わったな……」

そう言い残すとライトはその場から立ち去ろうとした

その時

ライチュウの体が後ろへ吹っ飛んだ

「兄貴！」

ライトが見た先には、空間を司るポケモン、パルキアが宙に立っていた

「う、ライト！逃げるんだ！」

ライチュウは血まみれで倒れている

ライトはパルキアを見つめ呟いた

「兄貴、変わっちゃった、けどまだ借りを返してなかったな、今度は俺が守る……」

そう言うと地面を蹴り飛ばし宙へ繰り出した

「行くぜ！！『蒼雷球【デスペラードサンダー】』 変換・>鳥<」

「

雷球を鳥の形に変形させその上に乗り空へ舞い上がる

「パルキア！テメエの命もこれまでだ！

『雷・神>槍<』！！」

そのまま、鳥を槍の形に変えパルキアの頭上から一気に下降し貫いた  
パルキアが地面へ崩れ落ちる

「ふう、終わったか……」

その直後、パルキアの体が動きだす

「ま、まだ、倒れていないだと!？」

ライトは雷球を構え体勢を整える

「さて、お前に危害は加えたりせん」

パルキアの言葉を聞き、ライトは雷球を消滅させる

「どうやら、お前さん達を傷つけてしまったようだな、すまない、  
しかしその事が記憶に無いのだ……」

久しぶりに亜空間から出たら捕まり、変な機械を取り付けられたの  
は覚えておるのだが、操られてしまったようだ……

神としてあるまじき失態許してくれ

私もお主等に協力もしてやる

どうかこの通りだ!!」

パルキアが土下座を始めてしまった為、速攻で中断させるライト

「と、言うことは許してくれるのか!!感謝する!では、又、会お  
う!

呼び出したい時はパルキア、カモン!!なり何なり好きなときに言

つてくれれば直ぐに駆けつけるぞ！」

そう言いバルキアは亜空間へと帰っていった



## なんか大変に…（後書き）

簡単にレジエント・ウェポン・リイの説明

レジエント・ウェポン・リイは自分の召喚出来る武器を好きな形に変化させる事が出来る

その力は神のポケモンの力に匹敵、又は越すとも言われている

ライトはまだ力を使いこなせておらず自分の大切なものを守りたい気持ちが強くなった時にしか発動出来ない

次回を

ライト

「お楽しみに!!」

## どうも神様（前書き）

なんか全く小説の続きが浮かばねえ（・・・）

## どうも神様

「な、何だっただ……あれが伝説のポケモンなのか……  
それとも、頭の打ち所が悪くて……  
つと、『高速移動』」

ライトは何故か高速移動でその場から動く  
その直後、ライトが元々立っていた場所に巨大なエネルギー弾が飛  
んで来た

「まったく、伝説のポケモンとやらは全員捕まっちゃったのかよ……」  
ライトがそう言いながら見ている方向には、なんとレックウザが浮  
かんでいたのだ

「ほんと、めんどくせえ一発で決めてやるぜ!!  
『神槍グングニグル』!!」

決して外れる事が無い神槍をライトがレックウザに向かって投げる  
神槍は一直線にレックウザに突き刺さった

## グリーン一行（前書き）

更新遅れました、すいませんm（――）m、それでは……

ライト

「どうぞ！」

## グリーン一行

ライアがなんちゃら、かんちゃら、やっている頃、グリーン達は……

「ライトは、無理ばかりするんだから……」

グリーンが走りながら文句を言う

「まあ、そう言わないで下さいグリーンさん、みんなの事を思っているんですよ、それに今回の敵は格が違います、一瞬でも気を抜いたら肉片になりかねません、相手はどうやらこちらを殺す気で来ているようなので『召還獣【炎】』『【炎】憑依』『火炎放射!』」

召還獣を自分に纏いブースターに進化し襲いかかってきたストライクに激しい豪火を浴びせ、吹き飛ばす

「俺に勝とうなんて百億年はえんだよ『雷』!」

フォースは上空から串刺しにしようと突っ込んできたオニドリルに雷を落とし地面に墜落させる

ソウ達が軽くあしらっているようだが、今までバトル大会で戦ってきたような奴らがここにいた場合、即死レベルのポケモンばかりである

「グリーンさん、フォース! 見て下さい! あそこで襲われる人がいます!」

ソウが示す先には、リングマから必死で逃げているポケモンがいた

「危ない！『にほん晴れ』『ソーラービーム・瞬』」

にほん晴れを使い、激しい日差しにした後、超高速のソーラービームをリングマの腹に当てリングマを後方に吹き飛ばす

「大丈夫？」

グリーンが尋ねると襲われていたポケモンはこくりと頷く

「よし、リングマはぼくに任せて、ソウとフォースはこの子を守って！」

「わかりました！」

「よっしゃあ！ やってやろうじゃねえか！」

グリーンはリングマ、ソウ、フォースは周りから襲いかかってくるポケモン達と対峙する

「コロす、コロす、ウガああアア！ 『ハカイコウセン』！」

リングマは破壊光線をグリーンに向けて放とうとする

しかし、グリーンが先に放ったソーラービームを受け中断してしまう

「ウガアアアア！ オマエ、ジャマ！ コロす！」

しかし、リングマはその場から動けなくなっていた  
なんと、リングマは体中が太い根っこに巻きつかれてのだ

「さっきのソーラービームは宿り木の種入りだったのさ！！　しかも、ばく自慢の生命力を受けた特別なね！」

リングマは宿り木に体力を奪われ地面に倒れた

「さあ、ソウ達の援護に行かなきゃ！！」

## グリーン一行（後書き）

バトルになって、フォースのキャラ豹変……  
次回はソウ達の戦いです！

ソウ

「お楽しみに！！！」  
」



サブタイは無い！（前書き）

ひどいサブタイですね、すみませんm（  
—  
—  
）m

サブタイは無い！

「小さい子を集団でイジめるのは駄目だよ」

「そうそう、1対1はケンカでも1対複数はいじめですから」

「……………」

相手のポケモン達は黙り込む

「……………ヤレ」

相手のポケモンの内一体が命令を出すと、周りにいた全てのポケモン達がフォース達に飛びかかって来る

「相手は約百、半分半分で五十……………フォースいける？」

「よっしゃ、任せとけ！！」

フォース（バトル時によりキャラ豹変中）はそう言うが早いが電気の双剣を合わせて大剣にして、敵に突っ込んでいった

「アイツもコンかいノぼすがヒツヨウとシテいるチからをもっているゾー！！……………カカレ！！」

「ちょっと待ちなよ、君たちの相手は僕だよ！ いでよ！！『召喚獣・炎』！！」

ソウガリザードンを作り出しリザードンを敵に突っ込ませる

「『リーフブレード』」

敵のジュプトルが、リザードンにリーフブレードを繰り返して、バラバラにするが、直ぐに集まり、復活する

「リザードン『火炎放射』！！そして、『ストーム』！！」

リザードンが火炎放射を放ち、敵を一ヶ所に集める、そして、ソウが放った、炎、水、草を纏った竜巻が敵を直撃する  
煙が収まるとソウが相手をしていた、敵は全て倒れていた

「ソウ、こっちは終わったよ」

「うん僕も終わりました」

「ソウ、フォース無事だった？」

二人が敵を一掃した所でグリーンがやって来た

「うん、無傷だよ」

そう会話をした後、襲われていたポケモンに話かける

「ねえ、大丈夫だった？」

「う、うん……それで、お兄ちゃん達は誰？」

「僕はソウ、見てのとうり色違いのイーブイ、そしてあのフシギダネがグリーンで、ピチューがフォース、君は？」

「僕は、ツタージャのガイア……」

「ガイア君よろしく！」

「あの、僕、女です……」

グリーンの握手をしようとしたツルがぴったりと動きが止まる

「……え？ええええ！」

「ごめん、ごめん、僕とか言ってたから、男の子かとおもっちゃったよ」

それから少しして、4人は打ち解けて笑いながら話していた

サブタイは無い！（後書き）

次話をお楽しみに！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2423j/>

---

ライトの旅 ～ 気球に乗って～

2011年5月2日20時34分発行